

VII 学校のあり方

- 学校が直面する課題について、大人、子どもそれぞれの立場から聞くことで、これからの学校のあり方についての考えを把握することにした。
- 調査の結果、教職員、保護者、学校評議員のいずれも、諸課題の解決に向けて、「個人の力だけではなく学校全体での取り組み」を必要とする回答の割合が最も高くなっている。
次いで、教職員は「教員一人ひとりが自らの指導力を自覚し、それぞれの能力に応じた向上に努める」、「地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める」、保護者と学校評議員は「指導力の高い教員を増やしていく」、「地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める」の順になっている。
- 「学校に行きたくないときがある」子どもは、小中高のいずれの学校段階においても、5割を超えている。その理由として、「疲れているから」という回答が最も多くなっている。
「学校に行きたくないときがある」と回答した子どもの割合を平成17年度調査結果と比較すると、小学生は今回の調査の54.1%に対して前回の調査では56.8%、中学生は今回の調査の56.9%に対して前回の調査では62.0%、高校生の回答は今回の調査の72.7%に対して前回の調査では73.8%、特別支援学校児童・生徒の回答は今回の調査の36.3%に対して前回の調査では50.8%となっている。
- また、小中高生共に「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」、「勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる」、「学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える」ようになるとよいと思っている。
特別支援学校児童・生徒は「いろいろな体験をする場面がもっと増える」、「いごちのいいところがある」、「みんなといっしょに行事をする回数が増える」ようになるとよいと思っている。回答の割合が最も高かった項目を平成17年度調査結果と比較すると、特別支援学校児童・生徒は今回の調査と同じく「いろいろな体験をする場面がもっと増える」とともに、「みんなといっしょに行事をする回数が増える」となっている。
- 義務教育学校・高等学校のあり方について、教職員、保護者、学校評議員、一般県民のいずれも、「生徒の個性化・多様化に対応しながらも、誰もが身につけるべき共通的な資質・能力の定着を重視した高等学校づくりをめざすべきだ」であり、次いで「各学校では、外部の意見や評価を生かし、地域に開かれた信頼される学校づくりをめざすべきだ」と回答する割合が高くなっている。
次いで、教職員は「各学校では、保護者や地域住民が学校運営に参画し、協働して地域とともにある学校づくりをめざすべきだ」としている。一方、保護者と一般県民は「小学校や中学校の再編統合によって1校あたりの児童・生徒数を確保し、子ども同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ」としている。また、学校評議員は「高等学校の新たな再編統合によって1校あたりの生徒数を確保し、生徒同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ」としている。
- 「県立(公立)高校と私立高校」について、一般県民は、県立(公立)高校の方が「就職」、「学校の行事・部活動」、「学校の雰囲気」はよく、私立高校の方が「施設や設備」、「学校の特色や個性」、「大学などへの進学」はよいと回答する割合が高くなっている。
県立(公立)高校と私立高校の選択については、「県立(公立)高校を選ぶ」、「どちらともいえない」、「私立高校を選ぶ」の順となっている。県立(公立)高校を選ぶ理由は「学費が安い」、「通学の便がよい」、「男女共学である」となっている。一方で、私立高校を選ぶ理由は「特色ある教育内容など興味・関心に応じた学習ができる」、「施設・設備が充実している」、「進学実績が高い」となっている。
- 「県立高校の改革の取り組み」について、一般県民は、「障害のある生徒にも、個々の障害の状況等に応じた指導を行う学校づくりの推進」、「専門的な知識や技能をしっかりと身につけさせる教育を行う学校づくりの推進」、「学習の遅れがちな生徒にも、学力の着実な定着を図るための学校づくりの推進」を必要とする回答の割合が高くなっている。
一方で、「私立高校のあり方」については、「社会のルールをきちんと守れるよう生徒指導に重点を置く」、「より特色ある教育内容の提供など生徒の学習ニーズに応じた教育を展開する」、「私学独自の『建学の精神』を生かす」べきであるとする回答の割合が高くなっている。

VII - 1 諸問題の解決の方策と学校のあり方

教職員、保護者、学校評議員に、諸課題の解決に向けた「これからの学校のあり方」について聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、教職員では「授業の質の向上や問題行動への対応などには、個人のみだけでなく学校全体でも取り組む」、「教員一人ひとりが自らの指導力を自覚し、それぞれの能力に応じた向上に努める」、「地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める」であり、保護者及び学校評議員では「授業の質の向上や問題行動への対応などには、個人のみだけでなく学校全体でも取り組む」、「指導力の高い教員を増やしていく」、「地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める」であった。

また、回答の割合が最も高かった項目を平成17年度調査結果と比較すると、教職員、保護者、学校評議員の回答はいずれの調査においても「授業の質の向上や問題行動への対応などには、個人のみだけでなく学校全体でも取り組む」との回答の割合が最も多く、平成25年度調査では教職員94.3%、保護者：91.3%、学校評議員：96.3%であり、平成17年度調査では教職員93.6%、保護者：89.7%、学校評議員：95.5%であった。

『諸問題の解決の方策と学校のあり方』について教職員、保護者、学校評議員に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、教職員では、「授業の質の向上や問題行動への対応などには、個人のみだけでなく学校全体でも取り組む」(94.3%)、「教員一人ひとりが自らの指導力を自覚し、それぞれの能力に応じた向上に努める」(89.0%)、「地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める」(78.1%)であり、保護者及び学校評議員では、「授業の質の向上や問題行動への対応などには、個人のみだけでなく学校全体でも取り組む」(保護者：91.3%、学校評議員：96.3%)、「指導力の高い教員を増やしていく」(保護者：73.8%、学校評議員：83.3%)、「地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める」(保護者：66.2%、学校評議員：81.2%)であった。(表VII-1、図VII-1～3 参照)

表 VII-1 諸問題の解決の方策と学校のあり方 「そう思う」と「どちらかというと思う」の合計(上位5項目)

	教職員	保護者	学校評議員
1位	授業の質の向上や問題行動への対応などには、個人のみだけでなく学校全体でも取り組む 94.3%	授業の質の向上や問題行動への対応などには、教員個人だけでなく学校全体でも取り組むようにする 91.3%	授業の質の向上や問題行動への対応などには、教員個人だけでなく学校全体でも取り組むようにする 96.3%
2位	教員一人ひとりが自らの指導力を自覚し、それぞれの能力に応じた向上に努める 89.0%	指導力の高い教員を増やしていく 73.8%	指導力の高い教員を増やしていく 83.3%
3位	地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める 78.1%	地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める 66.2%	地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める 81.2%
4位	教員の仕事が均分化・平準化できるよう、校内の組織や業務内容を見直す 73.7%	NPOや企業などとの連携・協力を進め、県民の力を生かした学校づくりを進める 44.4%	学校(校長)にいろいろな決定権を与えて、子どもの実態に応じた学校づくりを進める 57.9%
5位	NPOや企業などとの連携・協力を進め、県民の力を生かした学校づくりを進める 51.6%	学校が、子どもの教育だけでなく、地域の人々が学べる拠点としての役割をもつようにしていく 36.7%	NPOや企業などとの連携・協力を進め、県民の力を生かした学校づくりを進める 46.8%

図 VII-1 諸問題の解決の方策と学校のあり方(教職員 n=2,046)

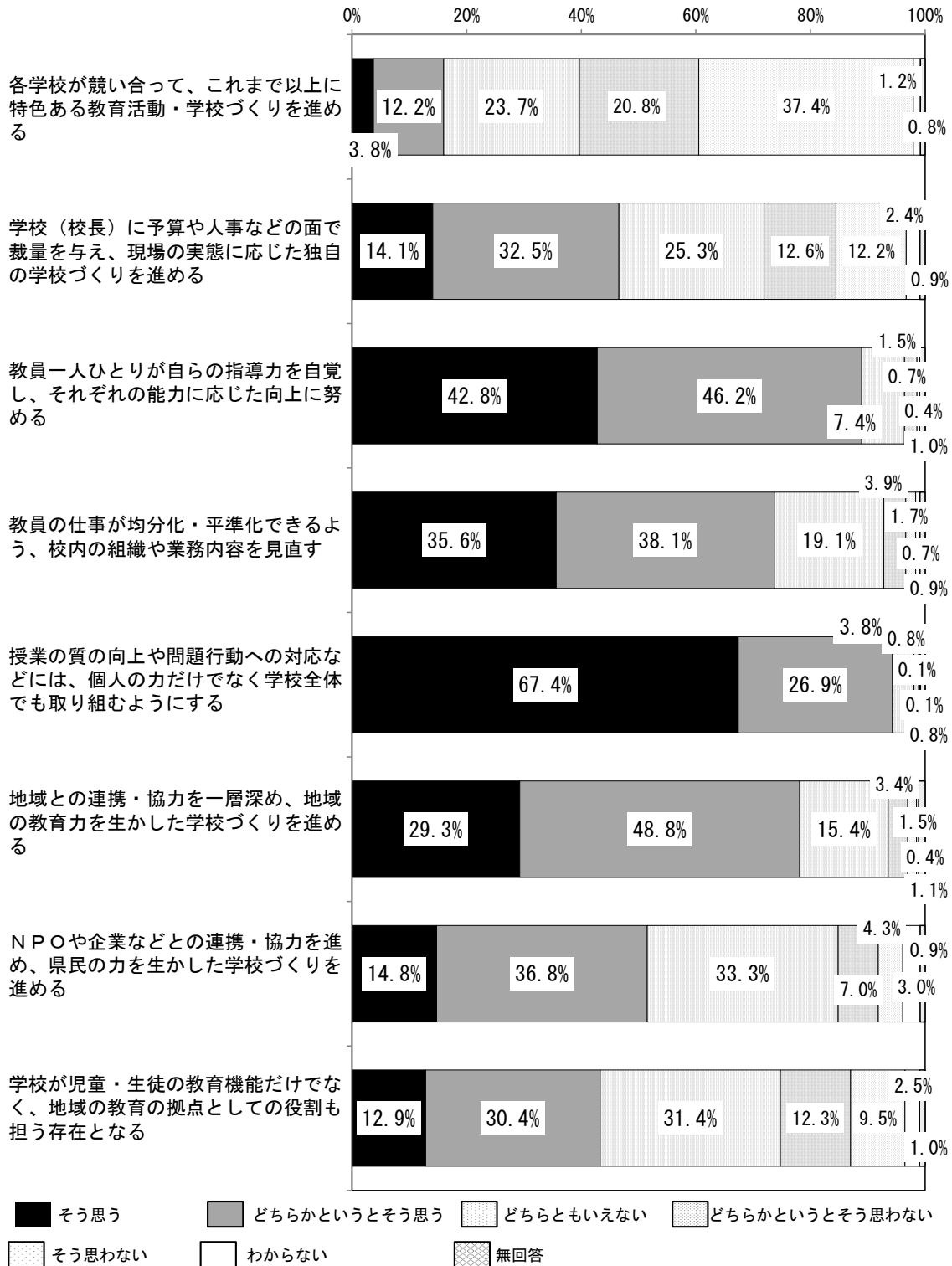


図 VII-2 諸問題の解決の方策と学校のあり方(保護者 n=3, 632)

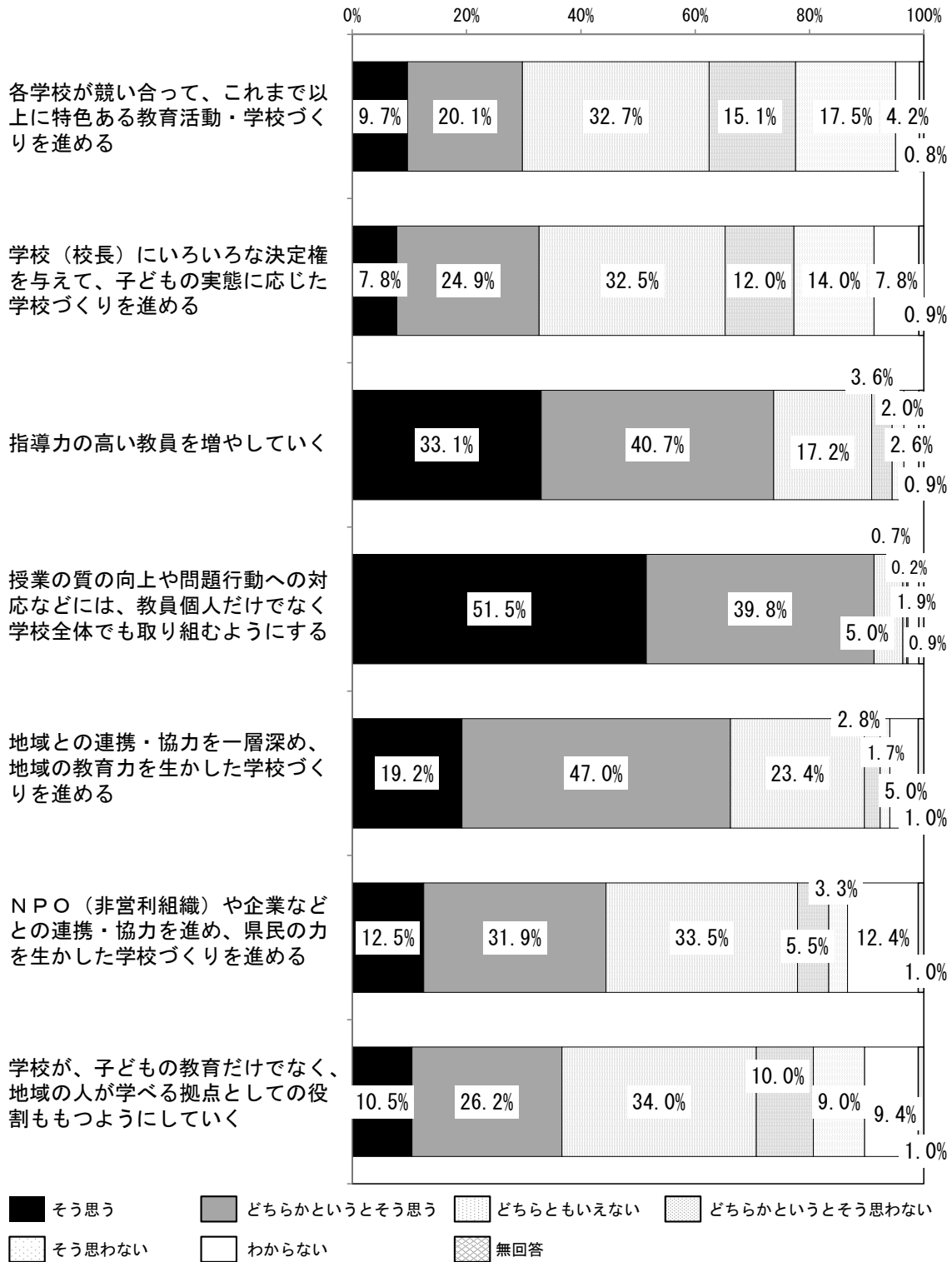
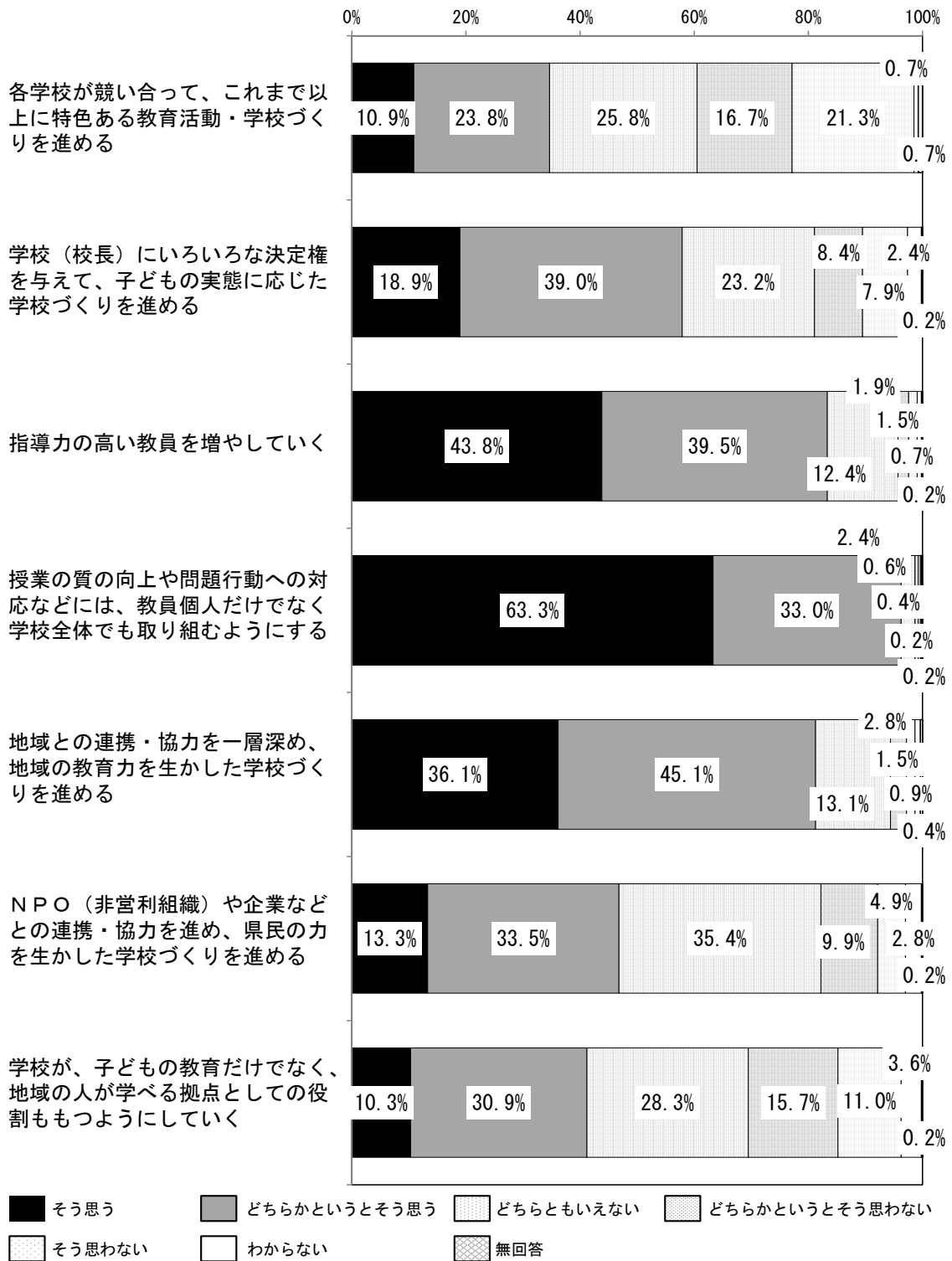


図 VII-3 諸問題の解決の方策と学校のあり方(学校評議員 n=534)



『諸問題の解決の方策と学校のあり方』について、回答の割合が高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、教職員の回答は平成 25 年度調査では「授業の質の向上や問題行動への対応などには、個人のみだけでなく学校全体でも取り組む」(94.3%)、「教員一人ひとりが自らの指導力を自覚し、それぞれの能力に応じた向上に努める」(89.0%)、「地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める」(78.1%)であり、平成 17 年度調査では「授業の質の向上や問題行動への対応などには、個人のみだけでなく学校全体でも取り組む」(93.6%)、「教員一人ひとりが自らの指導力を自覚し、それぞれの能力に応じた向上に努める」(89.4%)、「地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める」(78.9%)であった。一方、保護者及び学校評議員の回答は平成 25 年度調査では「授業の質の向上や問題行動への対応などには、個人のみだけでなく学校全体でも取り組む」(保護者：91.3%、学校評議員：96.3%)、「指導力の高い教員を増やしていく」(保護者：73.8%、学校評議員：83.3%)、「地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める」(保護者：66.2%、学校評議員：81.2%)であり、平成 17 年度調査では「授業の質の向上や問題行動への対応などには、個人のみだけでなく学校全体でも取り組む」(保護者：89.7%、学校評議員：95.5%)、「指導力の高い教員を増やしていく」(保護者：70.8%、学校評議員：84.9%)、「地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める」(保護者：66.6%、学校評議員：83.1%)であった。(表 VII-2 参照)

表 VII-2 諸問題の解決の方策と学校のあり方
「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計(上位6項目)

	教職員		保護者		学校評議員	
	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)
	n=2,046	n=1,863	n=3,632	n=3,876	n=534	n=515
1 位	授業の質の向上や問題行動への対応などには、個人の力だけでなく学校全体でも取り組む	授業の質の向上や問題行動への対応などには、個人の力だけでなく学校全体でも取り組む	授業の質の向上や問題行動への対応などには、教員個人だけでなく学校全体でも取り組むようにする	授業の質の向上や問題行動への対応などには、教員個人だけでなく学校全体でも取り組むようにする	授業の質の向上や問題行動への対応などには、教員個人だけでなく学校全体でも取り組むようにする	授業の質の向上や問題行動への対応などには、教員個人だけでなく学校全体でも取り組むようにする
	94.3%	93.6%	91.3%	89.7%	96.3%	95.5%
2 位	教員一人ひとりが自らの指導力を自覚し、それぞれの能力に応じた向上に努める	教員一人ひとりが自らの指導力を自覚し、それぞれの能力に応じた向上に努める	指導力の高い教員を増やしていく	指導力の高い教員を増やしていく	指導力の高い教員を増やしていく	指導力の高い教員を増やしていく
	89.0%	89.4%	73.8%	70.8%	83.3%	84.9%
3 位	地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める	地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める	地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める	地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める	地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める	地域との連携・協力を一層深め、地域の教育力を生かした学校づくりを進める
	78.1%	78.9%	66.2%	66.6%	81.2%	83.1%
4 位	教員の仕事が均分化・平準化できるよう、校内の組織や業務内容を見直す	教員の仕事が均分化・平準化できるよう、校内の組織や業務内容を見直す	NPOや企業などとの連携・協力を進め、県民の力を生かした学校づくりを進める	学校が、子どもへの教育だけでなく、地域の方が学べる拠点としての役割ももつようにしていく	学校(校長)にいろいろな決定権を与えて、子どもの実態に応じた学校づくりを進める	学校(校長)にいろいろな決定権を与えて、子どもの実態に応じた学校づくりを進める
	73.7%	68.8%	44.4%	42.5%	57.9%	61.5%
5 位	NPOや企業などとの連携・協力を進め、県民の力を生かした学校づくりを進める	NPOや企業などとの連携・協力を進め、県民の力を生かした学校づくりを進める	学校が、子どもの教育だけでなく、地域の方が学べる拠点としての役割ももつようにしていく	NPO(非営利組織)や企業などとの連携・協力を進め、県民の力を生かした学校づくりを進める	NPOや企業などとの連携・協力を進め、県民の力を生かした学校づくりを進める	学校が、子どもの教育だけでなく、地域の方が学べる拠点としての役割ももつようにしていく
	51.6%	52.3%	36.7%	39.3%	46.8%	51.3%
6 位	学校(校長)に予算や人事などの面で裁量を与え、現場の実態に応じた独自の学校づくりを進める	学校(校長)に予算や人事などの面で裁量を与え、現場の実態に応じた独自の学校づくりを進める	学校(校長)にいろいろな決定権を与えて、子どもの実態に応じた学校づくりを進める	学校(校長)にいろいろな決定権を与えて、子どもの実態に応じた学校づくりを進める	学校が、子どもの教育だけでなく、地域の方が学べる拠点としての役割ももつようにしていく	各学校が競い合って、これまで以上に特色ある教育活動・学校づくりを進める
	46.6%	51.1%	32.7%	31.7%	41.2%	39.6%

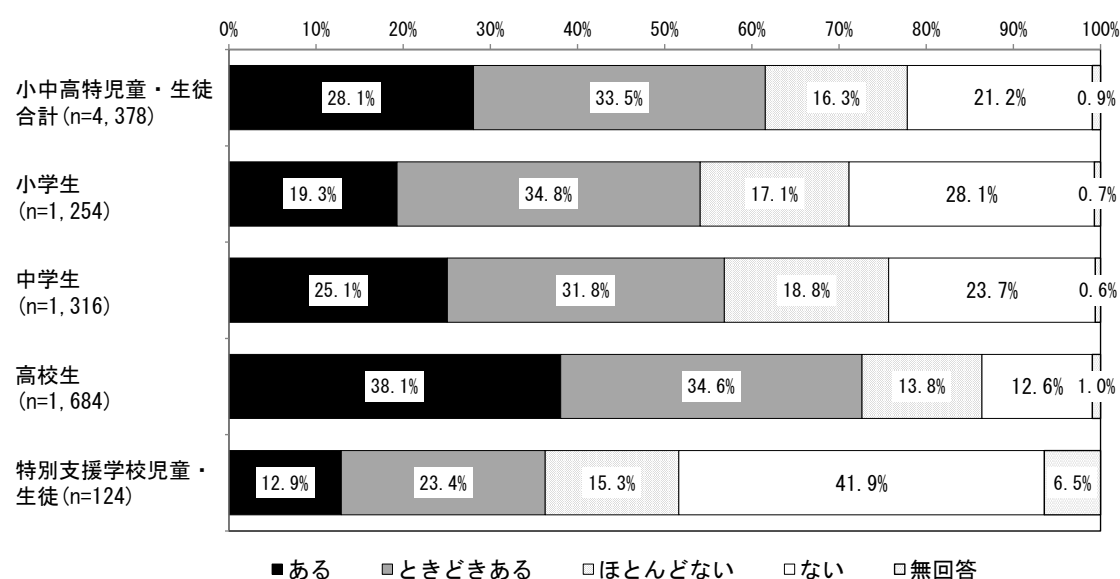
VII - 2 学校に行きたくないとき

子どもに『学校に行きたくないとき』があるかを聞いたところ、「ある」または「ときどきある」との回答は、小学生では 54.1%、中学生では 56.9%、高校生では 72.7%、特別支援学校児童・生徒では 36.3%であった。

また、平成 17 年度調査結果と比較すると、小学生の回答は平成 25 年度調査の 54.1%に対して平成 17 年度調査では 56.8%、中学生の回答は平成 25 年度調査の 56.9%に対して平成 17 年度調査では 62.0%、高校生の回答は平成 25 年度調査の 72.7%に対して平成 17 年度調査では 73.8%、特別支援学校児童・生徒の回答は平成 25 年度調査の 36.3%に対して平成 17 年度調査では 50.8%であった。

『学校に行きたくないとき』があるかを児童・生徒に聞いたところ、「ある」または「ときどきある」との回答は、小学生では 54.1%、中学生では 56.9%、高校生では 72.7%、特別支援学校児童・生徒では 36.3%であった。(図VII-4 参照)

図 VII-4 学校に行きたくないとき(児童・生徒)



『学校に行きたくないとき』があるかとの質問への「ある」または「ときどきある」との回答結果について、平成 17 年度調査結果と比較すると、小学生の回答は平成 25 年度調査の 54.1%に対して平成 17 年度調査では 56.8%、中学生の回答は平成 25 年度調査の 56.9%に対して平成 17 年度調査では 62.0%、高校生の回答は平成 25 年度調査の 72.7%に対して平成 17 年度調査では 73.8%、特別支援学校児童・生徒の回答は平成 25 年度調査の 36.3%に対して平成 17 年度調査では 50.8%であった。(図VII-5, 6 参照)

図 VII-5 学校に行きたくないとき(小中高生)

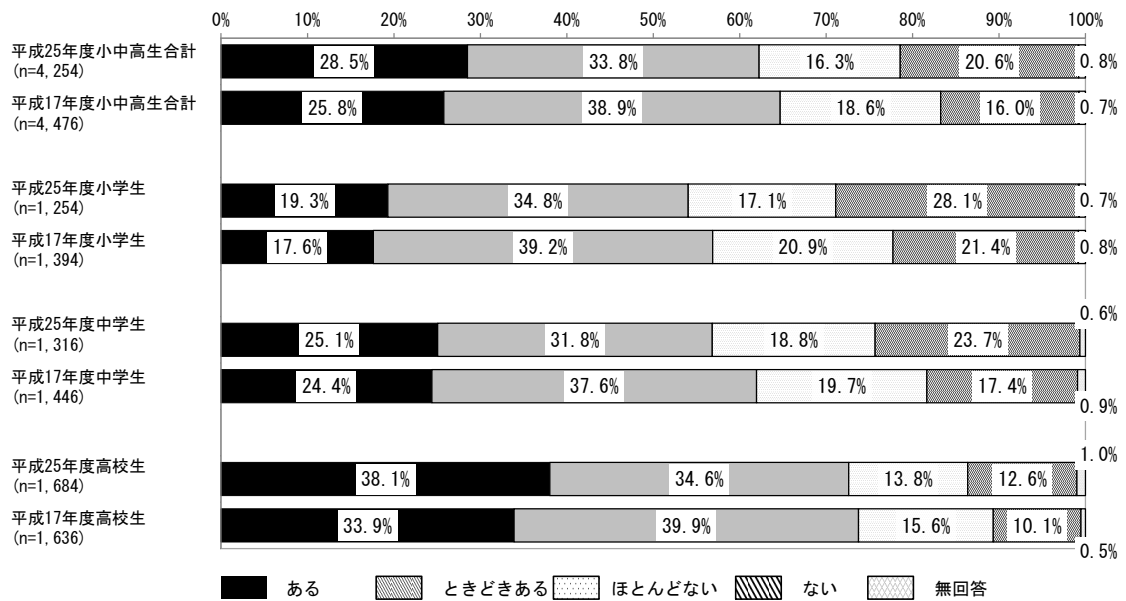
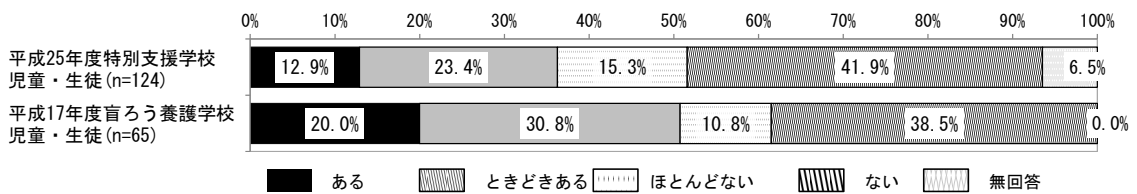


図 VII-6 学校に行きたくないとき(特別支援学校児童・生徒)



VII - 3 学校に行きたくない理由

Ⅶ-2で、「学校に行きたくないとき」が「ある」、「ときどきある」、「ほとんどない」と回答した子どもに、「学校に行きたくない理由」について聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、すべての校種で「疲れているから」の割合が最も高く、次いで、小中高生では「なんとなく気持ちが乗らないから」、「家にいる方が楽しいから」、特別支援学校児童・生徒では「わからない」、「家にいる方が楽しいから」が続いている。

また、『学校に行きたくない理由』について、回答の割合が最も高かった項目を平成17年度調査結果と比較すると、すべての校種の児童・生徒がいずれの調査においても、「疲れているから」を理由として回答する割合が最も高く、平成25年度調査では小学生45.2%、中学生59.3%、高校生66.4%、特別支援学校児童・生徒40.6%であり、平成17年度調査では小学生46.7%、中学生58.3%、高校生64.5%、特別支援学校児童・生徒47.5%であった。

『学校に行きたくない理由』について児童・生徒に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、すべての校種で「疲れているから」（小学生：45.2%、中学生：59.3%、高校生：66.4%、特別支援学校児童・生徒：40.6%）を理由として回答している割合が最も高くなっており、次いで、小中高生では「なんとなく気持ちが乗らないから」（小学生：37.3%、中学生：38.6%、高校生：46.9%）、「家にいる方が楽しいから」（小学生：22.1%、中学生：18.0%、高校生：14.4%）、特別支援学校児童・生徒では「わからない」（18.8%）、「家にいる方が楽しいから」（15.6%）の割合が高くなっている。（表Ⅶ-3、図Ⅶ-7,8 参照）

表 VII-3 学校に行きたくない理由(上位5項目)

	小学生	中学生	高校生	特別支援学校児童・生徒
1位	疲れているから 45.2%	疲れているから 59.3%	疲れているから 66.4%	疲れているから 40.6%
2位	なんとなくやる気が起きないから 37.3%	なんとなく気持ちが乗らないから 38.6%	なんとなく気持ちが乗らないから 46.9%	わからない 18.8%
3位	家にいる方が楽しいから 22.1%	家にいる方が楽しいから 18.0%	家にいる方が楽しいから 14.4%	家にいる方が楽しいから 15.6%
4位	その他 14.0%	その他 16.5%	その他 10.1%	授業がつまらないから 14.1%
5位	先生がいやなときがあるから 9.2%	自分と合わない先生がいるから 7.5%	仲の良い友だちが少ないから 6.3%	いじわるをされるから 10.9%

図 VII-7 学校に行きたくない理由(小中高生)

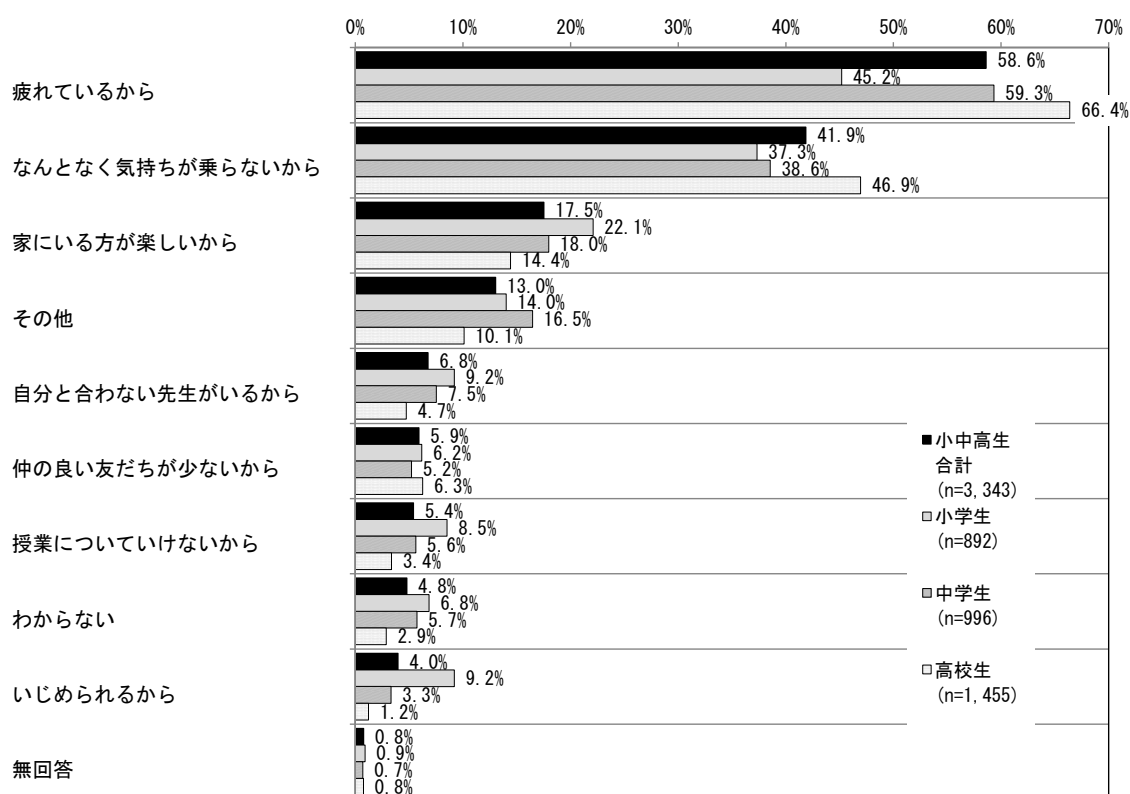
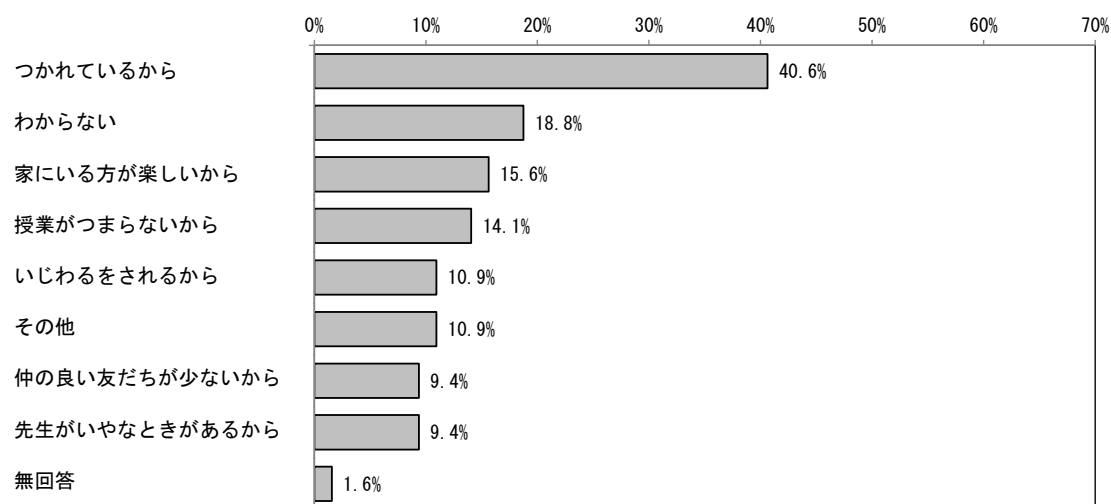


図 VII-8 学校に行きたくない理由(特別支援学校児童・生徒 n=64)



< 「その他」 の主な回答 >

[小中高生共通]

- ・眠いから、朝がつらいから
- ・授業や勉強が嫌だから
- ・苦手な友だちがいるから
- ・体調が悪いから

[小学生]

- ・宿題が終わっていないから
- ・友だちとけんかしているから
- ・体育があるから
- ・給食で嫌いなものが出るから
- ・受験勉強をしたいから

[中学生]

- ・宿題が終わっていないから
- ・友だちとけんかしているから
- ・みんなの前での発表があるから
- ・部活動がきついから
- ・天候が悪いから
- ・学校が遠いから
- ・遊んでいたいから

[高校生]

- ・課題がたまっているから
- ・授業のスピードが遅いから
- ・部活動がつらいから
- ・天候が悪いから
- ・学校が遠いから
- ・アルバイトをしたいから

[特別支援学校児童・生徒]

- ・授業が3コマもあると長く感じるから
- ・苦手な友だちがいるから
- ・先生に障害特性を理解してもらえないときがあるから
- ・久しぶりで緊張するから

など

『学校に行きたくない理由』について、回答の割合が高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、小学生の回答は平成 25 年度調査では「疲れているから」(45.2%)、「なんとなくやる気が起きないから」(37.3%)、「家にいる方が楽しいから」(22.1%)であり、平成 17 年度調査では「疲れているから」(46.7%)、「なんとなく気持ちがのらないから」(33.9%)、「家にいる方が楽しいから」(16.2%)であった。中高生の回答は平成 25 年度調査では「疲れているから」(中学生：59.3%、高校生：66.4%)、「なんとなく気持ちが乗らないから」(中学生：38.6%、高校生：46.9%)、「家にいる方が楽しいから」(中学生：18.0%、高校生：14.4%)であり、平成 17 年度調査では「疲れているから」(中学生：58.3%、高校生：64.5%)、「なんとなく気持ちが乗らないから」(中学生：39.9%、高校生：51.0%)、「その他」(中学生：13.3%、高校生：10.0%)であった。特別支援学校児童・生徒の回答は平成 25 年度調査では「疲れているから」(40.6%)、「わからない」(18.8%)、「家にいる方が楽しいから」(15.6%)であり、平成 17 年度調査では「疲れているから」(47.5%)、「家にいる方が楽しいから」(25.0%)、「授業がつまらないから」(22.5%)であった。(表VII-4 参照)

表 VII-4 学校に行きたくない理由(上位 7 項目)

	小学生		中学生	
	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)
	n=892	n=1,084	n=996	n=1,181
1 位	疲れているから 45.2%	疲れているから 46.7%	疲れているから 59.3%	疲れているから 58.3%
2 位	なんとなくやる気が起きないから 37.3%	なんとなく気持ちがのらないから 33.9%	なんとなく気持ちが乗らないから 38.6%	なんとなく気持ちが乗らないから 39.9%
3 位	家にいる方が楽しいから 22.1%	家にいる方が楽しいから 16.2%	家にいる方が楽しいから 18.0%	その他 13.3%
4 位	その他 14.0%	わからない 10.1%	その他 16.5%	家にいる方が楽しいから 11.5%
5 位	先生がいやなときがあるから	いじめられるから 9.9%	自分と合わない先生がいるから 7.5%	自分と合わない先生がいるから 10.8%
6 位	いじめられるから 9.2%	授業についていけないから 9.8%	わからない 5.7%	仲の良い友だちが少ないから
7 位	授業についていけないから 8.5%	その他 9.3%	授業についていけないから 5.6%	授業についていけないから 6.7%

	高校生		特別支援学校児童・生徒	
	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)
	n=1,455	n=1,462	n=64	n=40
1位	疲れているから 66.4%	疲れているから 64.5%	疲れているから 40.6%	疲れているから 47.5%
2位	なんとなく気持ちが乗らないから 46.9%	なんとなく気持ちが乗らないから 51.0%	わからない 18.8%	家にいる方が楽しいから 25.0%
3位	家にいる方が楽しいから 14.4%	その他 10.0%	家にいる方が楽しいから 15.6%	授業がつまらないから 22.5%
4位	その他 10.1%	家にいる方が楽しいから 7.7%	授業がつまらないから 14.1%	わからない 17.5%
5位	仲の良い友だちが少ないから 6.3%	自分と合わない先生がいるから 5.6%	いじわるをされるから その他	その他 15.0%
6位	自分と合わない先生がいるから 4.7%	仲の良い友だちが少ないから 5.0%	その他 10.9%	先生がいやなときがあるから 12.5%
7位	授業についていけないから 3.4%	授業についていけないから 4.8%	仲の良い友達が少ないから 先生がいやなときがあるから 9.4%	いじわるをされるから 7.5%

VII-4 学校がどのようになったらよいと思うか

子どもに「学校がどのようになったらよいと思うか」を聞いたところ、回答の割合が高かった項目は小学生では「学校の活動で、いろいろな体験をする場面がもっとふえる」、「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」、「勉強の時間や内ようがふえても、一人ひとりの進み方に合わせて勉強させてくれる」であり、中学生では、「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」、「学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える」、「勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる」、高校生では、「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」、「勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる」、「学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える」、特別支援学校児童・生徒では、「いろいろな体験をする場面がもっと増える」、「いごちのいいところがある」、「みんなといっしょに行事をする回数が増える」であった。

また、回答の割合が最も高かった項目を平成17年度調査結果と比較すると、小学生の回答はいずれの調査においても「学校の活動で、いろいろな体験をする場面がもっとふえる」との回答の割合が最も高く、平成25年度調査では34.9%、平成17年度調査では39.2%であり、中高生の回答はいずれの調査においても「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」との回答の割合が最も高く、平成25年度調査では中学生41.9%、高校生34.4%、平成17年度調査では中学生45.2%、高校生42.5%であった。特別支援学校児童・生徒の回答は平成25年度調査では「いろいろな体験をする場面がもっと増える」(39.5%)であり、平成17年度調査では「いろいろな体験をする場面がもっと増える」と「みんなといっしょに行事をする回数が増える」(共に29.2%)であった。

『これからの学校のあり方』について児童・生徒に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は小学生では、「学校の活動で、いろいろな体験をする場面がもっとふえる」(34.9%)、「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」(31.9%)、「勉強の時間や内ようがふえても、一人ひとりの進み方に合わせて勉強させてくれる」(24.7%)であり、中学生では、「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」(41.9%)、「学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える」(27.1%)、「勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる」(26.0%)、高校生では、「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」(34.4%)、「勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる」(24.3%)、「学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える」(23.5%)、特別支援学校児童・生徒では、「いろいろな体験をする場面がもっと増える」(39.5%)、「いごちのいいところがある」(24.2%)、「みんなといっしょに行事をする回数が増える」(21.8%)であった。(表VII-5、図VII-9, 10 参照)

表 VII-5 これからの学校(上位5項目)

	小学生	中学生	高校生	特別支援学校児童・生徒
1位	学校の活動で、いろいろな体験をする場面がもっとふえる 34.9%	学校にいとほっとしたり、楽な気持ちになれる 41.9%	学校にいとほっとしたり、楽な気持ちになれる 34.4%	いろいろな体験をする場面がもっと増える 39.5%
2位	学校にいとほっとしたり、楽な気持ちになれる 31.9%	学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える 27.1%	勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる 24.3%	いごちのいいところがある 24.2%
3位	勉強の時間や内ようがふえても、一人ひとりの進み方に合わせて勉強させてくれる 24.7%	勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる 26.0%	学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える 23.5%	みんなといっしょに行事をする回数が増える 21.8%
4位	同級生や上級生、下級生といっしょに行事などをする場面がふえる 21.6%	同級生や上級生、下級生と一緒に行事などに取り組む機会が増える 21.4%	同級生や上級生、下級生と一緒に行事などに取り組む機会が増える 18.2%	一人ひとりに対し、もっとていねいにめんどろを見てくれる 20.2%
5位	ほかの学校に自慢できることがある 17.1%	ほかの学校に自慢できることがある 14.6%	社会のことや大人になったときのことをたくさん教えてくれる 17.6%	いろいろな経験をしているたくさんの人に出える 18.5%

図 VII-9 これからの学校のあり方(小中高生)

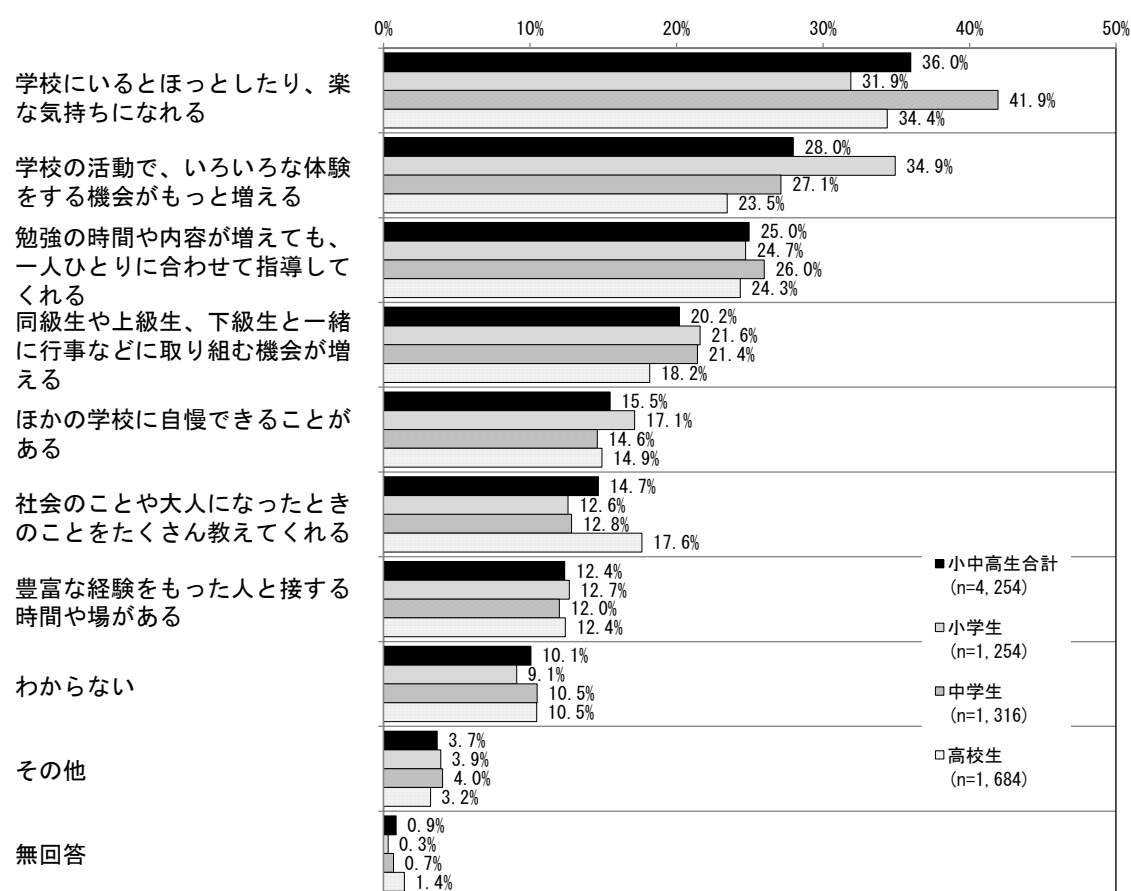
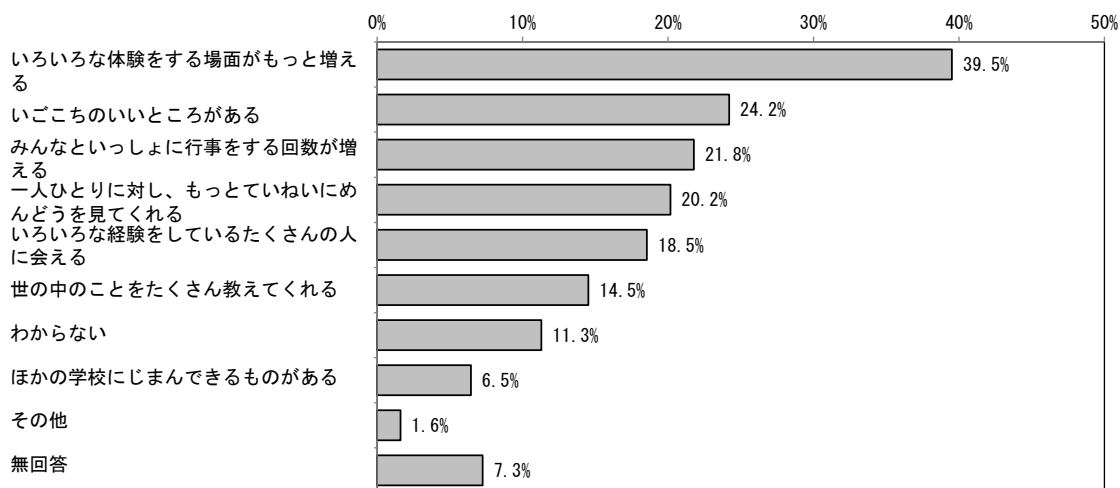


図 VII-10 これからの学校 (特別支援学校児童・生徒 n=124)



平成 17 年度調査との比較

『これからの学校のあり方』について、回答の割合が高かった項目を平成17年度調査結果と比較すると、小学生の回答は平成25年度調査では「学校の活動で、いろいろな体験をする場面がもっとふえる」(34.9%)、「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」(31.9%)、「勉強の時間や内ようがふえても、一人ひとりの進み方に合わせて勉強させてくれる」(24.7%)であり、平成17年度調査では「学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える」(39.2%)、「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」(34.6%)、「同級生や上級生、下級生と一緒に行事などをする機会が増える」(20.8%)であった。

中学生では、「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」(41.9%)、「学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える」(27.1%)、「勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる」(26.0%)であり、平成17年度調査では「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」(45.2%)、「学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える」(27.0%)、「勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる」(25.6%)であった。

高校生では、「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」(34.4%)、「勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる」(24.3%)、「学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える」(23.5%)であり、平成17年度調査では「学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる」(42.5%)、「学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える」(24.1%)、「勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる」(23.0%)であった。

特別支援学校児童・生徒では、「いろいろな体験をする場面がもっと増える」(39.5%)、「いごちのいいところがある」(24.2%)、「みんなといっしょに行事をする回数が増える」(21.8%)であり、平成17年度調査では「いろいろな体験をする場面がもっと増える」(29.2%)、「みんなといっしょに行事をする回数が増える」(29.2%)、「いごちのいいところがある」(23.1%)であった。(表VII-6 参照)

表 VII-6 これからの学校のあり方(上位5項目)

	小学生		中学生	
	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)
	n=1, 254	n=1, 394	n=1, 316	n=1, 446
1 位	学校の活動で、いろいろな体験をする場面がもっとふえる	学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える	学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる	学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる
	34.9%	39.2%	41.9%	45.2%
2 位	学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる	学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる	学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える	学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える
	31.9%	34.6%	27.1%	27.0%
3 位	勉強の時間や内ようがふえても、一人ひとりの進み方に合わせて勉強させてくれる	同級生や上級生、下級生と一緒に行事などをする機会が増える	勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる	勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる
	24.7%	20.8%	26.0%	25.6%
4 位	同級生や上級生、下級生といっしょに行事などをする場面がふえる	勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる	同級生や上級生、下級生と一緒に行事などに取り組む機会が増える	同級生や上級生、下級生と一緒に行事などに取り組む機会が増える
	21.6%	19.0%	21.4%	18.3%
5 位	ほかの学校に自慢できることがある	ほかの学校に自慢できることがある	ほかの学校に自慢できることがある	ほかの学校に自慢できることがある
	17.1%	16.4%	14.6%	13.8%

	高校生		特別支援学校児童・生徒	
	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)	(平成 25 年度)	(平成 17 年度)
	n=1, 684	n=1, 636	n=124	n=65
1 位	学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる	学校にいるとほっとしたり、楽な気持ちになれる	いろいろな体験をする場面がもっと増える	いろいろな体験をする場面がもっと増える
	34.4%	42.5%	39.5%	みんなといっしょに行事をする回数が増える
2 位	勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる	学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える	いごちのいいところがある	
	24.3%	24.1%	24.2%	29.2%
3 位	学校の活動で、いろいろな体験をする機会がもっと増える	勉強の時間や内容が増えても、一人ひとりに合わせて指導してくれる	みんなといっしょに行事をする回数が増える	いごちのいいところがある
	23.5%	23.0%	21.8%	23.1%
4 位	同級生や上級生、下級生と一緒に行事などに取り組む機会が増える	同級生や上級生、下級生と一緒に行事などに取り組む機会が増える	一人ひとりに対し、もっていねいにめんどろを見てくれる	いろいろな経験を持ったたくさんの人に会える
	18.2%	16.6%	20.2%	
5 位	社会のことや大人になったときのことをたくさん教えてくれる	社会のことや大人になったときのことをたくさん教えてくれる	いろいろな経験をしているたくさんの人に会える	わからない
	17.6%	16.3%	18.5%	20.0%

VII - 5 義務教育学校・高等学校のあり方

教職員、保護者、学校評議員、一般県民に『義務教育学校・高等学校のあり方』について聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、教職員、保護者、学校評議員、一般県民のいずれにおいても「生徒の個性化・多様化に対応しながらも、誰もが身につけるべき共通的な資質・能力の定着を重視した高等学校づくりをめざすべきだ」であり、次いで「各学校では、外部の意見や評価を生かし、地域に開かれた信頼される学校づくりをめざすべきだ」であった。続いて、教職員では「各学校では、保護者や地域住民が学校運営に参画し、協働して地域とともにある学校づくりをめざすべきだ」、保護者及び一般県民では「小学校や中学校の再編統合によって1校あたりの児童・生徒数を確保し、子ども同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ」、学校評議員では「高等学校の新たな再編統合によって1校あたりの生徒数を確保し、生徒同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ」との回答の割合が高くなっている。

『義務教育学校・高等学校のあり方』について教職員、保護者、学校評議員及び一般県民に聞いたところ、回答の割合が高かった項目は、教職員、保護者、学校評議員、一般県民のいずれにおいても「生徒の個性化・多様化に対応しながらも、誰もが身につけるべき共通的な資質・能力の定着を重視した高等学校づくりをめざすべきだ」（教職員：73.4%、保護者：72.4%、学校評議員：84.1%、一般県民：74.8%）であり、次いで「各学校では、外部の意見や評価を生かし、地域に開かれた信頼される学校づくりをめざすべきだ」（教職員：65.2%、保護者：68.9%、学校評議員：80.3%、一般県民：69.7%）であった。続いて、教職員では「各学校では、保護者や地域住民が学校運営に参画し、協働して地域とともにある学校づくりをめざすべきだ」（44.5%）、保護者及び一般県民では「小学校や中学校の再編統合によって1校あたりの児童・生徒数を確保し、子ども同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ」（保護者：43.2%、一般県民：51.7%）、学校評議員では「高等学校の新たな再編統合によって1校あたりの生徒数を確保し、生徒同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ」（52.6%）との回答の割合が高くなっている。（表VII-7、図VII-11～14 参照）

表 VII-7 義務教育学校・高等学校のあり方 「そう思う」と「どちらかというと思う」の合計(上位5項目)

	教職員	保護者	学校評議員	一般県民
1位	生徒の個性化・多様化に対応しながらも、誰もが身につけるべき共通的な資質・能力の定着を重視した高等学校づくりをめざすべきだ	生徒の個性化・多様化に対応しながらも、誰もが身につけるべき共通的な資質・能力の定着を重視した高等学校づくりをめざすべきだ	生徒の個性化・多様化に対応しながらも、誰もが身につけるべき共通的な資質・能力の定着を重視した高等学校づくりをめざすべきだ	生徒の個性化・多様化に対応しながらも、誰もが身につけるべき共通的な資質・能力の定着を重視した高等学校づくりをめざすべきだ
	73.4%	72.4%	84.1%	74.8%
2位	各学校では、外部の意見や評価を生かし、地域に開かれた信頼される学校づくりをめざすべきだ	各学校では、外部の意見や評価を生かし、地域に開かれた信頼される学校づくりをめざすべきだ	各学校では、外部の意見や評価を生かし、地域に開かれた信頼される学校づくりをめざすべきだ	各学校では、外部の意見や評価を生かし、地域に開かれた信頼される学校づくりをめざすべきだ
	65.2%	68.9%	80.3%	69.7%
3位	各学校では、保護者や地域住民が学校運営に参画し、協働して地域とともにある学校づくりをめざすべきだ	小学校や中学校の再編統合によって1校あたりの児童・生徒数を確保し、子ども同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ	高等学校の新たな再編統合によって1校あたりの生徒数を確保し、生徒同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ	小学校や中学校の再編統合によって1校あたりの児童・生徒数を確保し、子ども同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ
	44.5%	43.2%	52.6%	51.7%
4位	小学校や中学校の再編統合によって1校あたりの児童・生徒数を確保し、子ども同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ	各学校では、保護者や地域住民が学校運営に参画し、協働して地域とともにある学校づくりをめざすべきだ	各学校では、保護者や地域住民が学校運営に参画し、協働して地域とともにある学校づくりをめざすべきだ	各学校では、保護者や地域住民が学校運営に参画し、協働して地域とともにある学校づくりをめざすべきだ
	39.4%	42.6%	52.4%	50.6%
5位	高等学校の新たな再編統合によって1校あたりの生徒数を確保し、生徒同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ	高等学校の新たな再編統合によって1校あたりの生徒数を確保し、生徒同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ	小学校や中学校の再編統合によって1校あたりの児童・生徒数を確保し、子ども同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ	高等学校の新たな再編統合によって1校あたりの生徒数を確保し、生徒同士の学び合いや行事等の充実をめざすべきだ
	36.6%	38.0%	49.0%	46.4%

図 VII-11 義務教育学校・高等学校のあり方(教職員 n=2,046)

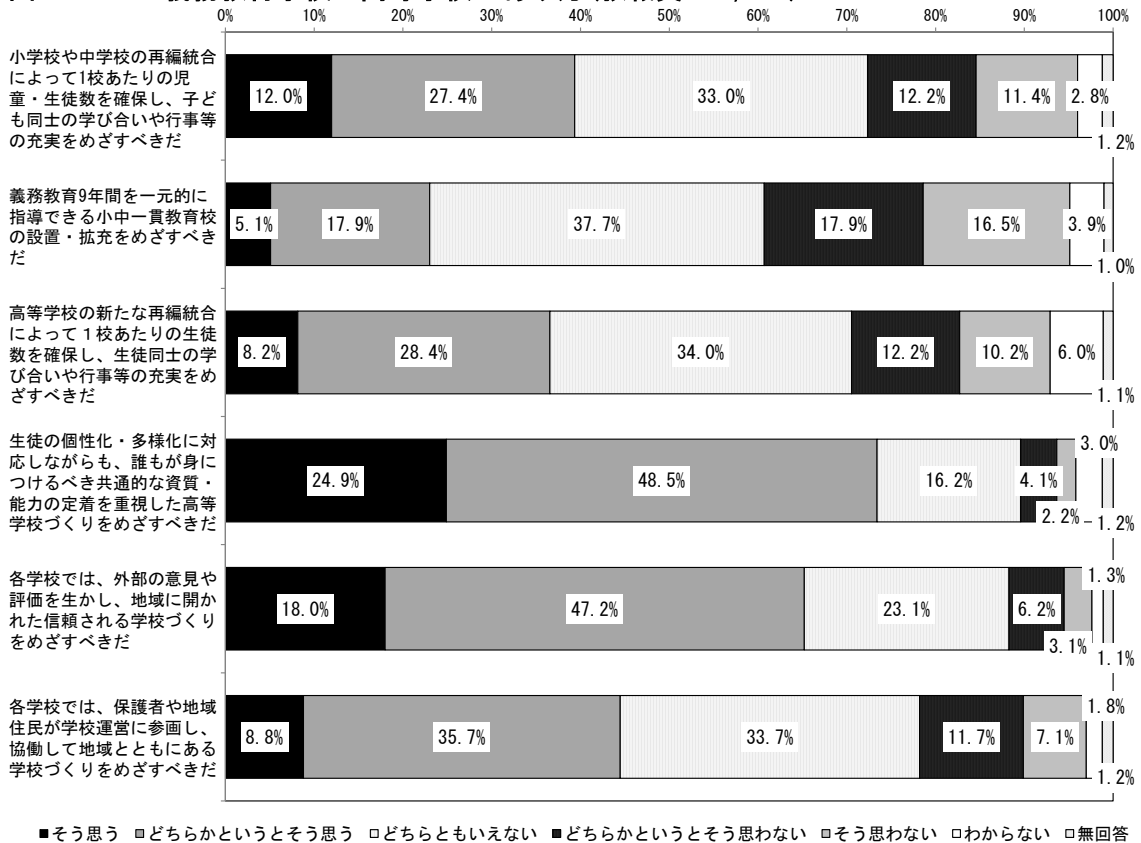


図 VII-12 義務教育学校・高等学校のあり方(保護者 n=3,632)

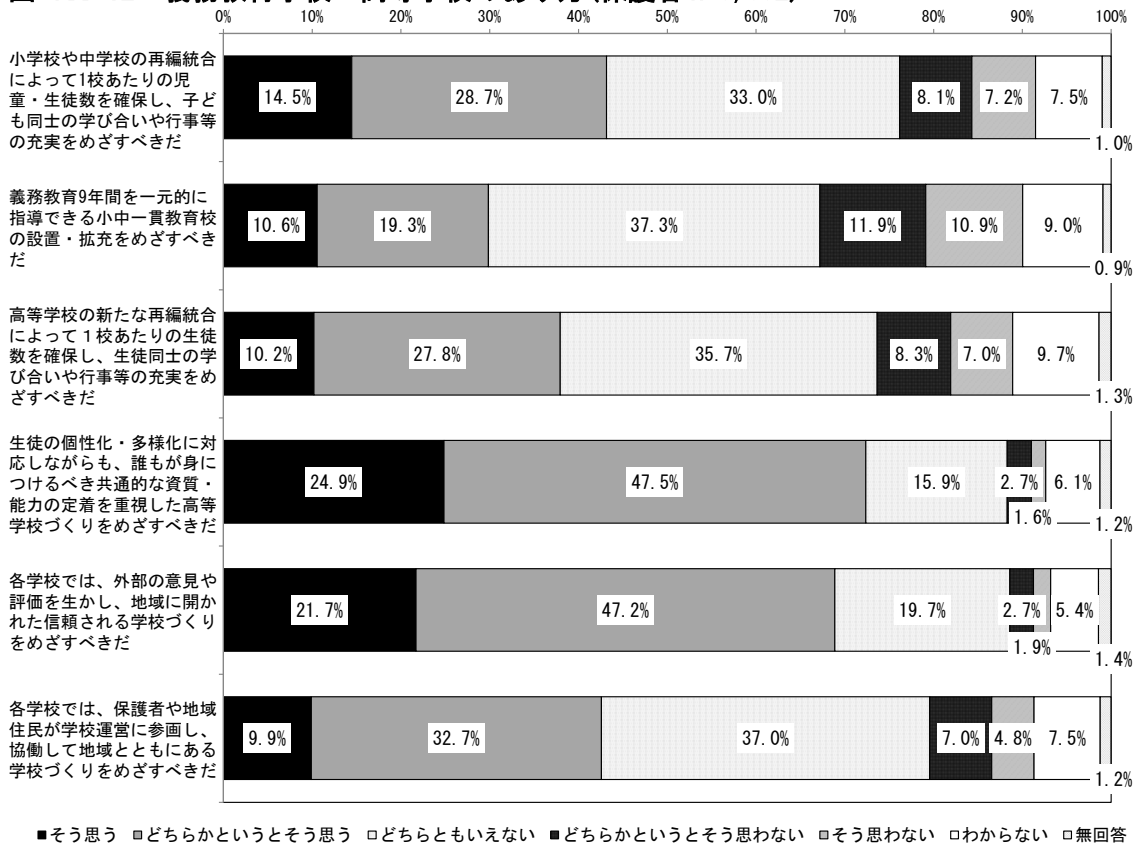


図 VII-13 義務教育学校・高等学校のあり方(学校評議員 n=534)

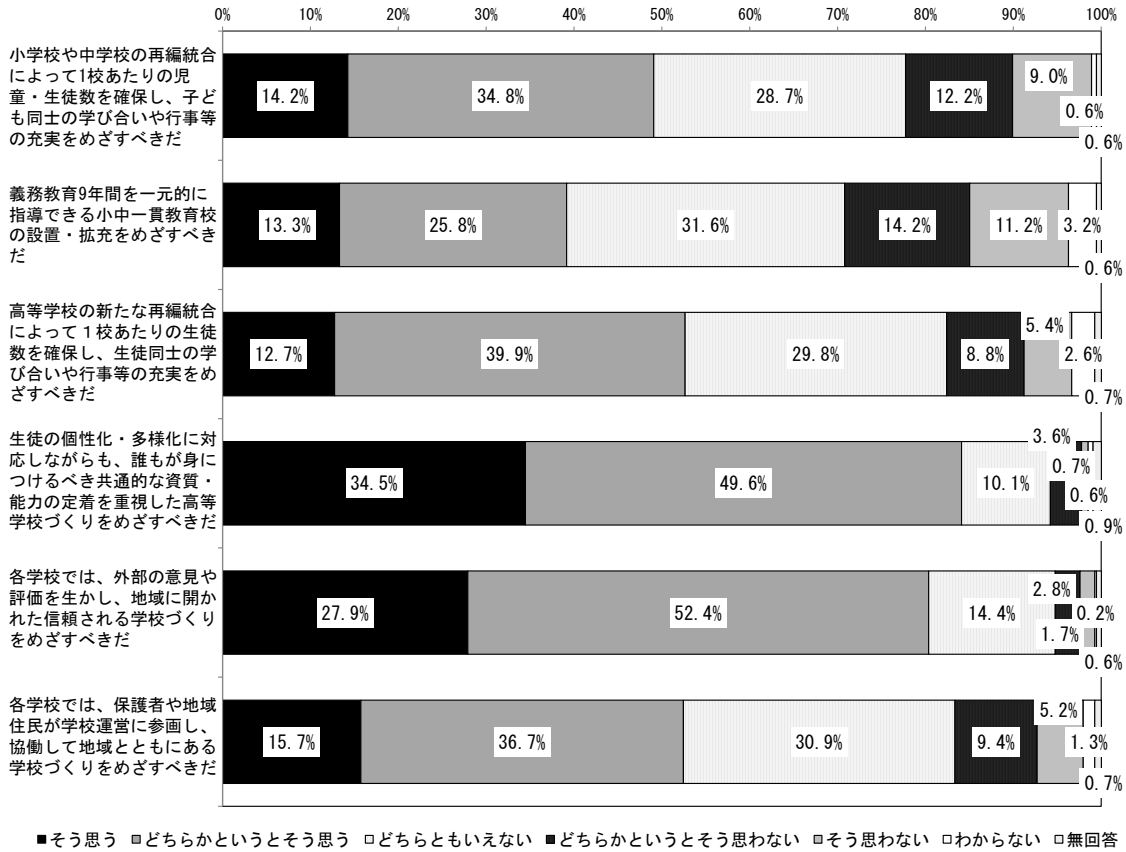
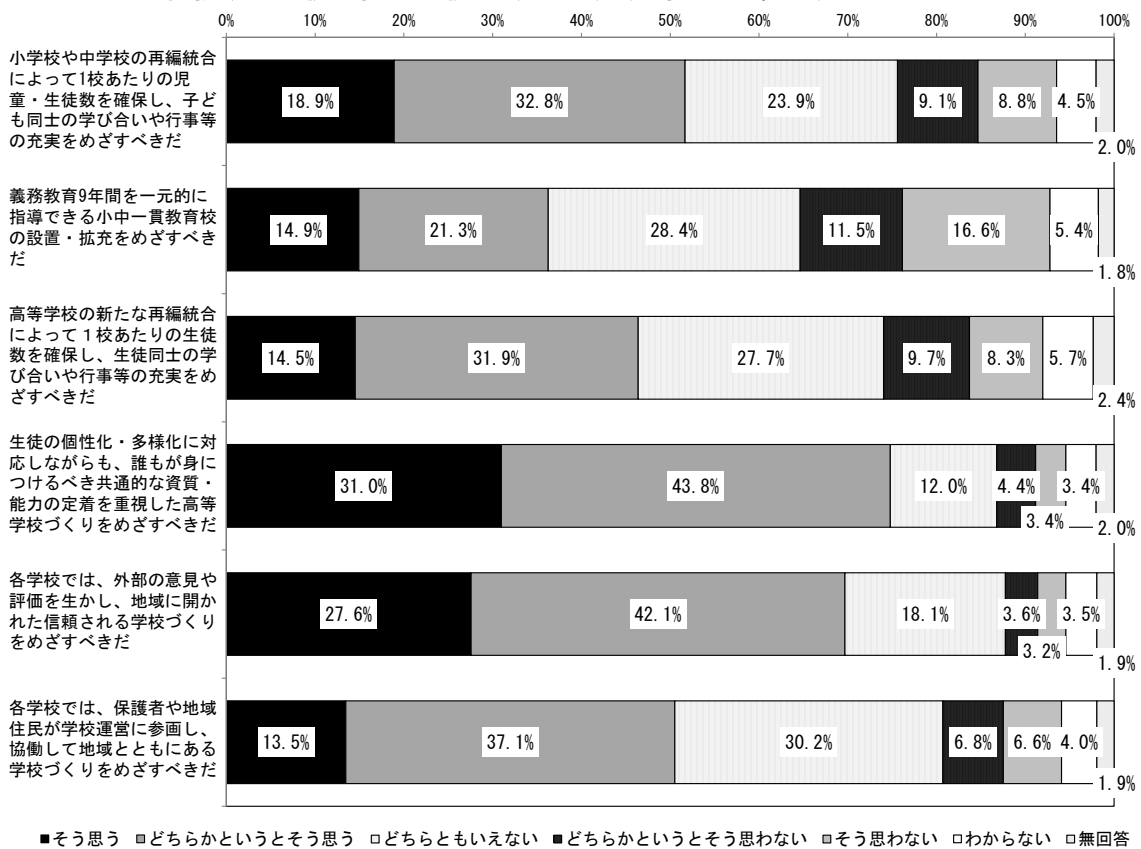


図 VII-14 義務教育学校・高等学校のあり方(一般県民 n=1,233)



VII - 6 県立(公立)高校と私立高校

一般県民に対して、『県立(公立)高校と私立高校』について聞いたところ、「県立(公立)の方がよい」との回答で割合が高かった項目は「就職」、「学校の行事・部活動」、「学校の雰囲気」であり、「私立の方がよい」との回答で割合が高かった項目は「施設や設備」、「学校の特色や個性」、「大学などへの進学」であった。県立(公立)高校と私立高校のどちらを進学先として選ぶかを聞いたところ、「県立(公立)高校を選ぶ」、「どちらともいえない」、「私立高校を選ぶ」の順に回答の割合が高かった。そして、県立(公立)高校を選ぶ理由として回答した割合の高かった項目は「学費が安い」、「通学の便がよい」、「男女共学である」であり、私立高校を選ぶ理由として回答した割合の高かった項目は「特色ある教育内容など興味・関心に応じた学習ができる」、「施設・設備が充実している」、「進学実績が高い」であった。

また、回答の割合が最も高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、「県立(公立)の方がよい」との回答で割合が高かった項目はいずれの調査においても「就職」であり、平成 25 年度調査では 12.3%、平成 17 年度調査では 10.1%であった。一方、「私立の方がよい」との回答で割合が高かった項目はいずれの調査においても「施設や設備」であり、平成 25 年度調査では 72.1%、平成 17 年度調査では 59.7%であった。県立(公立)高校と私立高校のどちらを進学先として選ぶかへの回答で最も割合が高かったのはいずれの調査においても「県立(公立)高校を選ぶ」であり、平成 25 年度調査 43.1%、平成 17 年度調査 40.3%であった。そして、県立(公立)高校を選ぶ理由として回答した割合の高かった項目はいずれの調査においても「学費が安い」との回答の割合が最も高く、平成 25 年度調査では 91.5%、平成 17 年度調査では 87.9%であった。

『県立(公立)高校と私立高校』について一般県民に聞いたところ、「県立(公立)の方がよい」との回答で割合が高かった項目は「就職」(12.3%)、「学校の行事・部活動」(10.1%)、「学校の雰囲気」(8.8%)であり、「私立の方がよい」との回答で割合が高かった項目は「施設や設備」(72.1%)、「学校の特色や個性」(61.9%)、「大学などへの進学」(47.1%)であった。

また、県立(公立)高校と私立高校のどちらを進学先として選ぶかを聞いたところ、「県立(公立)高校を選ぶ」(43.1%)、「どちらともいえない」(23.1%)、「私立高校を選ぶ」(22.5%)との回答結果であった。

さらに、県立(公立)高校を選ぶ理由として回答した割合の高かった項目は「学費が安い」(91.5%)、「通学の便がよい」(41.2%)、「男女共学である」(39.2%)であり、私立高校を選ぶ理由として回答した割合の高かった項目は「特色ある教育内容など興味・関心に応じた学習ができる」(40.3%)、「施設・設備が充実している」(39.6%)、「進学実績が高い」(39.2%)であった。(図VII-15～17 参照)

図 VII-15 県立(公立)高校と私立高校を比べると、次の点について、どちらの方がよいと思うか(一般県民 n=1, 233)

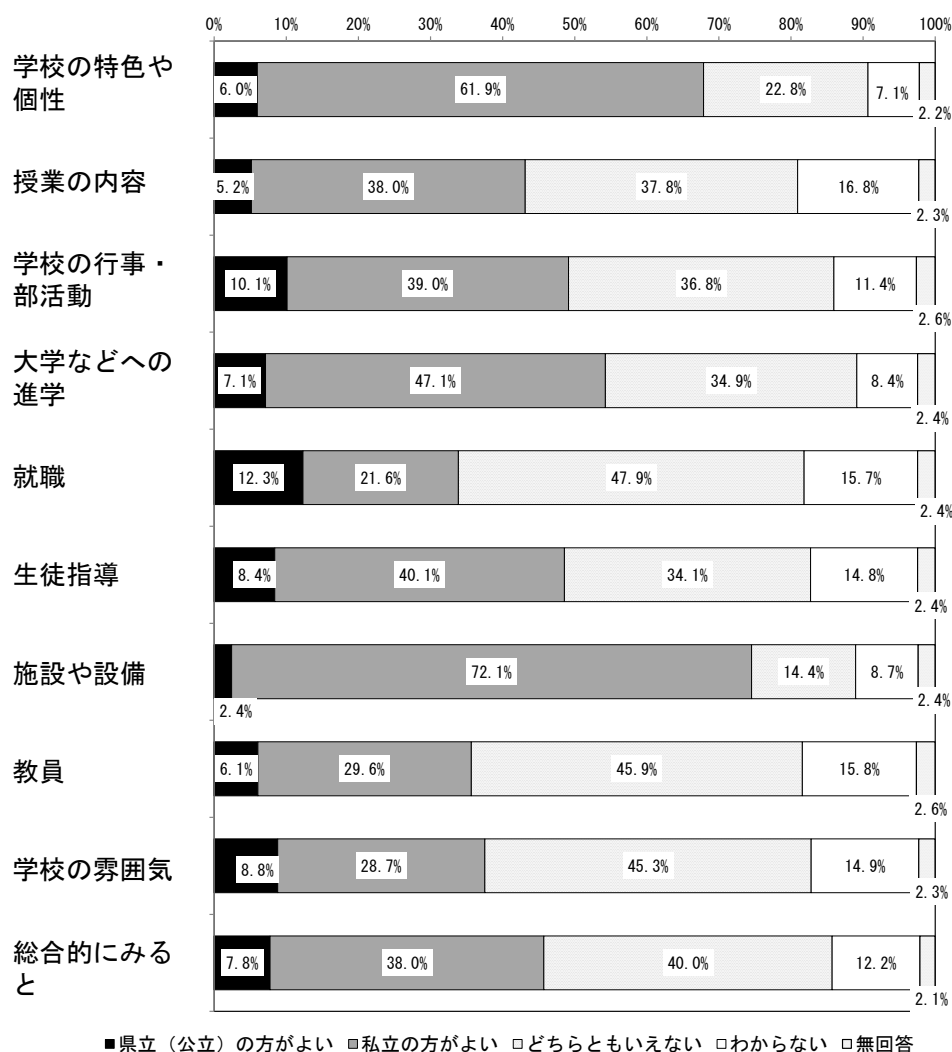


図 VII-16 もし、あなたが(またはお子様が)中学3年生だとしたら、県立(公立)高校と私立高校のどちらを選ぶか(一般県民 n=1, 233)

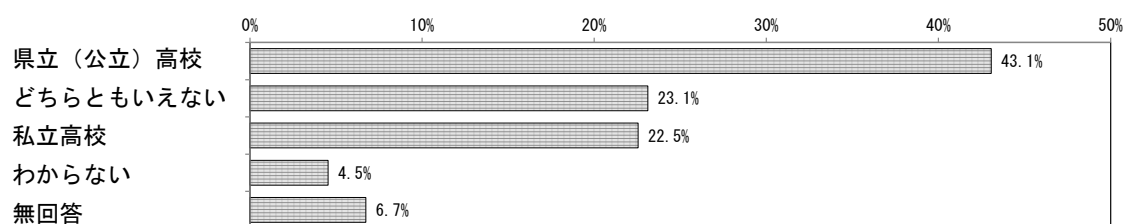
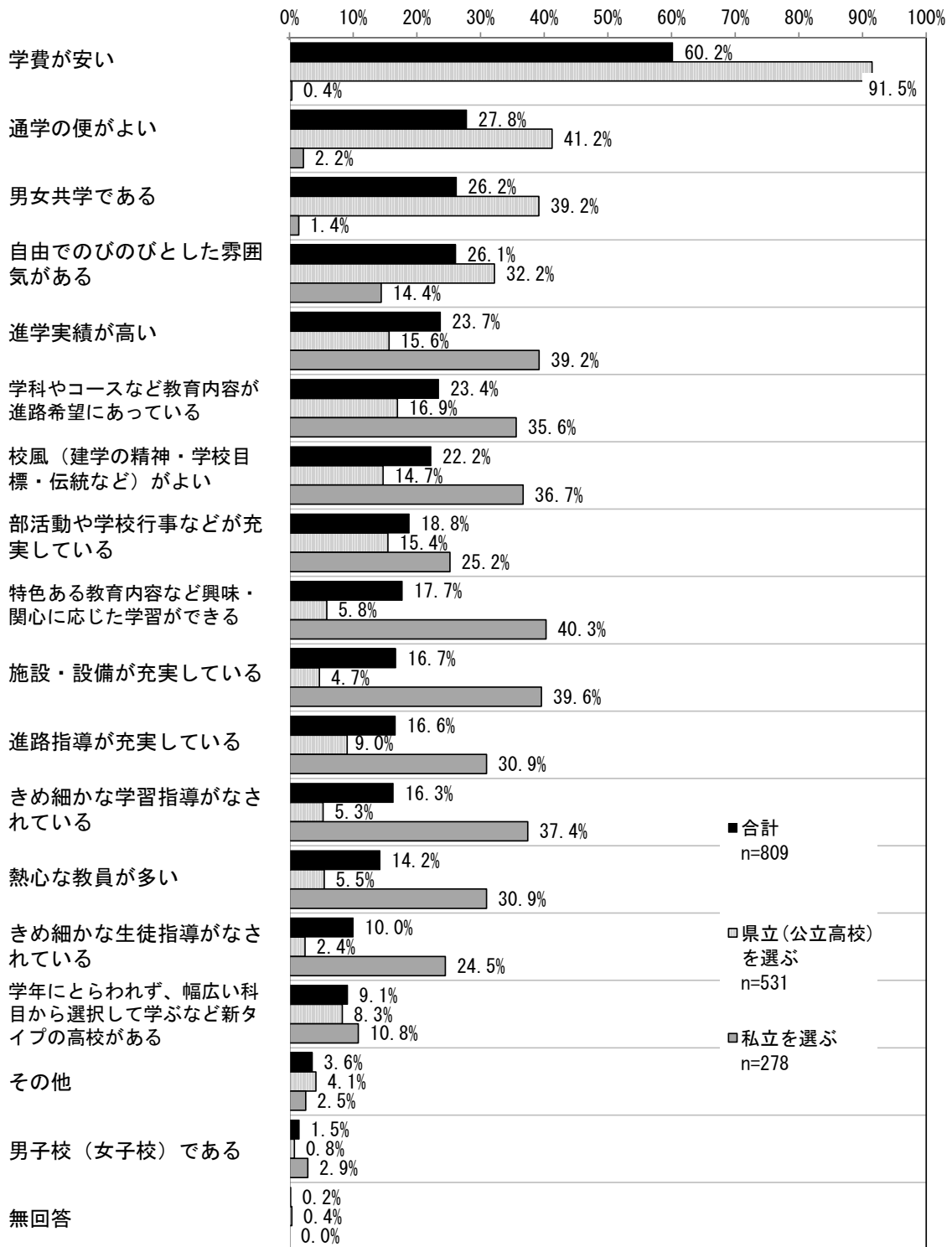


図 VII-17 県立(公立)または私立を選んだ理由の主なもの(一般県民)



平成 17 年度調査との比較

『県立(公立)高校と私立高校』について回答の割合が高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、「県立(公立)の方がよい」との回答で割合が高かった項目は平成 25 年度調査では「就職」(12.3%)、「学校の行事・部活動」(10.1%)、「学校の雰囲気」(8.8%)であり、平成 17 年度調査では「就職」(10.1%)、「学校の行事・部活動」(8.7%)、「大学などへの進学」(8.7%)であった。一方、「私立の方がよい」との回答で割合が高かった項目は平成 25 年度調査では「施設や設備」(72.1%)、「学校の特色や個性」(61.9%)、「大学などへの進学」(47.1%)であり、平成 17 年度調査では「施設や設備」(59.7%)、「学校の特色や個性」(52.9%)、「大学などへの進学」(44.8%)であった。

また、県立(公立)高校と私立高校のどちらを進学先として選ぶかを聞いたところ、その回答は、平成 25 年度調査では「県立(公立)高校を選ぶ」(43.1%)、「どちらともいえない」(23.1%)、「私立高校を選ぶ」(22.5%)であり、平成 17 年度調査では「県立(公立)高校を選ぶ」(40.3%)、「私立高校を選ぶ」(26.5%)、「どちらともいえない」(18.6%)であった。

さらに、県立(公立)高校を選ぶ理由として回答した割合の高かった項目は平成 25 年度調査では「学費が安い」(91.5%)、「通学の便がよい」(41.2%)、「男女共学である」(39.2%)、平成 17 年度調査では「学費が安い」(87.9%)、「通学の便がよい」(38.1%)、「男女共学である」(31.1%)であり、私立高校を選ぶ理由として回答した割合の高かった項目は平成 25 年度調査では「特色ある教育内容など興味・関心に応じた学習ができる」(40.3%)、「施設・設備が充実している」(39.6%)、「進学実績が高い」(39.2%)、平成 17 年度調査では「きめ細やかな学習指導がなされている」(40.9%)、「校風(建学の精神・学校目標・伝統など)がよい」(36.5%)、「特色ある教育内容など興味・関心に応じた学習ができる」(34.3%)であった。(図VII-18～31 参照)

図 VII-18 県立(公立)高校と私立高校を比べると、次の点について、どちらの方がよいと思うか ①学校の特色や個性(一般県民 平成 25 年度 n=1,233、平成 17 年度 n=1,530)

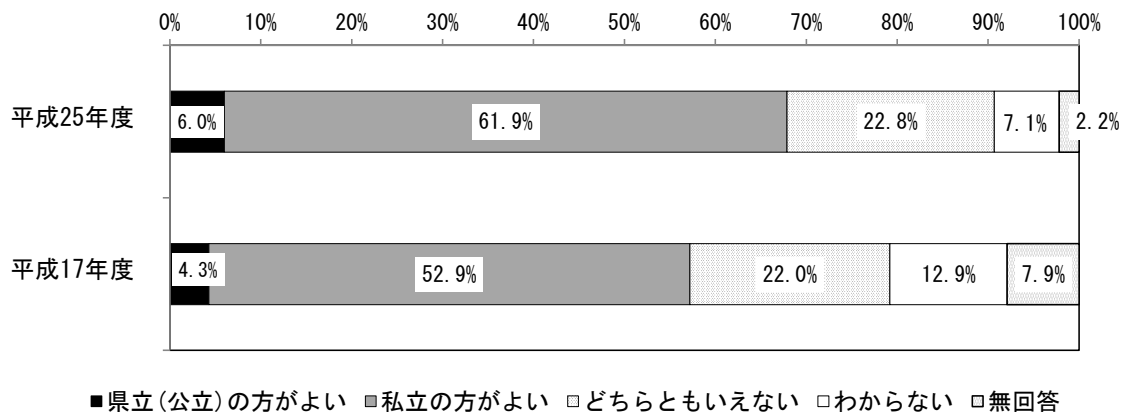
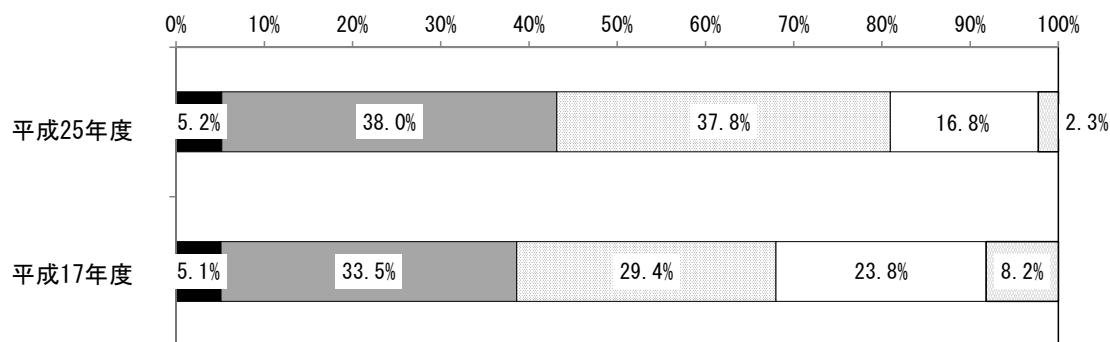
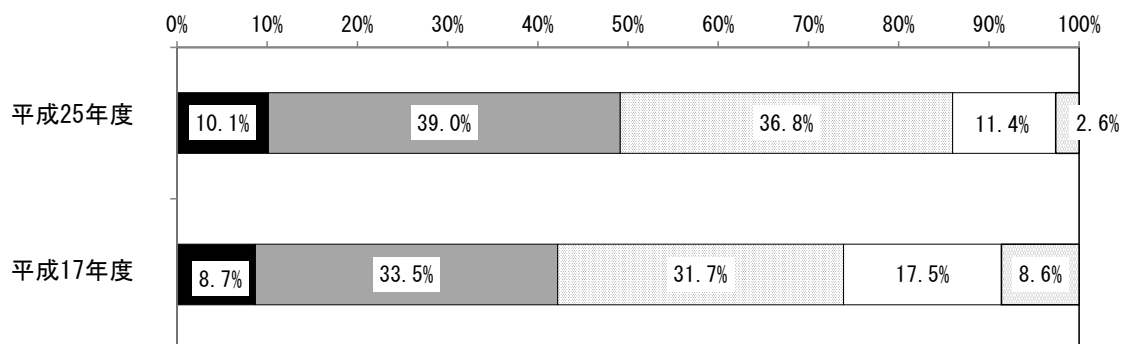


図 VII-19 県立(公立)高校と私立高校を比べると、次の点について、どちらの方がよいと思うか ②授業の内容(一般県民 平成25年度 n=1,233、平成17年度 n=1,530)



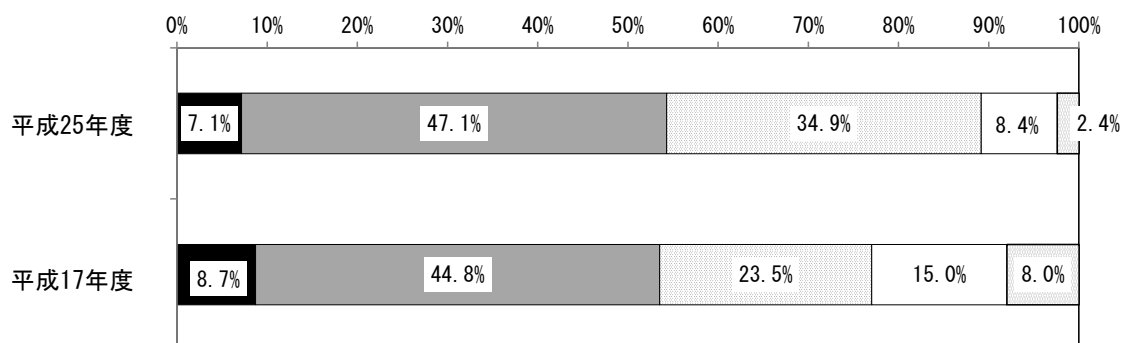
■県立(公立)の方がよい □私立の方がよい □どちらともいえない □わからない □無回答

図 VII-20 県立(公立)高校と私立高校を比べると、次の点について、どちらの方がよいと思うか ③学校の行事・部活動(一般県民 平成25年度 n=1,233、平成17年度 n=1,530)



■県立(公立)の方がよい □私立の方がよい □どちらともいえない □わからない □無回答

図 VII-21 県立(公立)高校と私立高校を比べると、次の点について、どちらの方がよいと思うか ④大学などへの進学(一般県民 平成25年度 n=1,233、平成17年度 n=1,530)



■県立(公立)の方がよい □私立の方がよい □どちらともいえない □わからない □無回答

図 VII-22 県立(公立)高校と私立高校を比べると、次の点について、どちらの方がよいと思うか ⑤就職(一般県民 平成25年度 n=1,233、平成17年度 n=1,530)

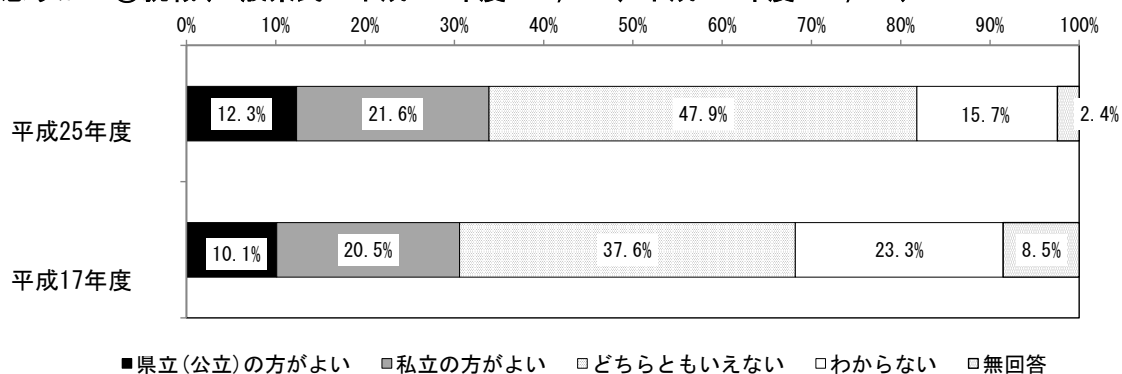


図 VII-23 県立(公立)高校と私立高校を比べると、次の点について、どちらの方がよいと思うか ⑥生徒指導(一般県民 平成25年度 n=1,233、平成17年度 n=1,530)

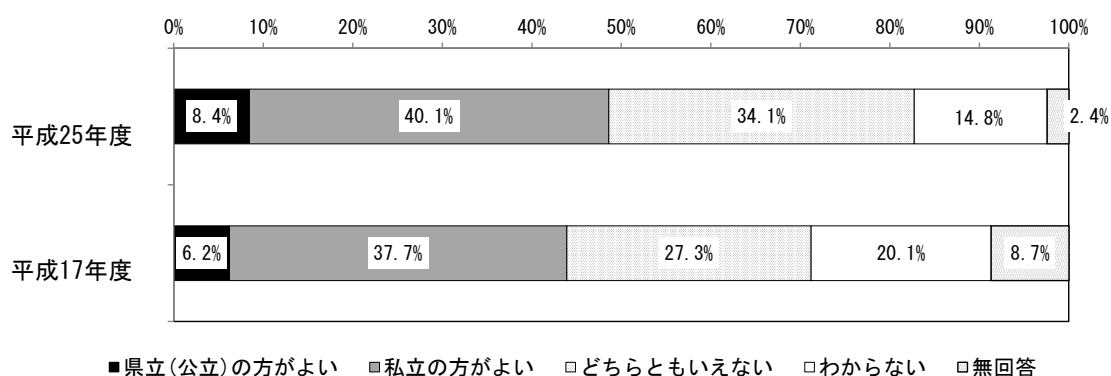


図 VII-24 県立(公立)高校と私立高校を比べると、次の点について、どちらの方がよいと思うか ⑦施設や設備(一般県民 平成25年度 n=1,233、平成17年度 n=1,530)

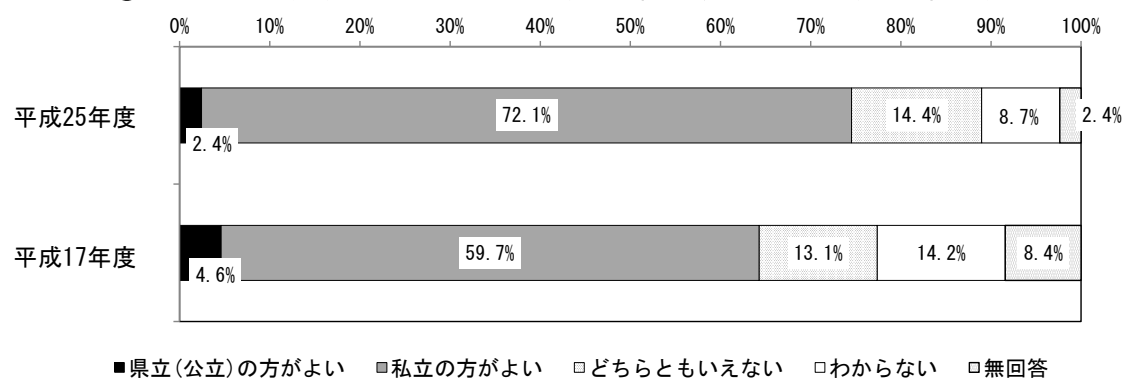
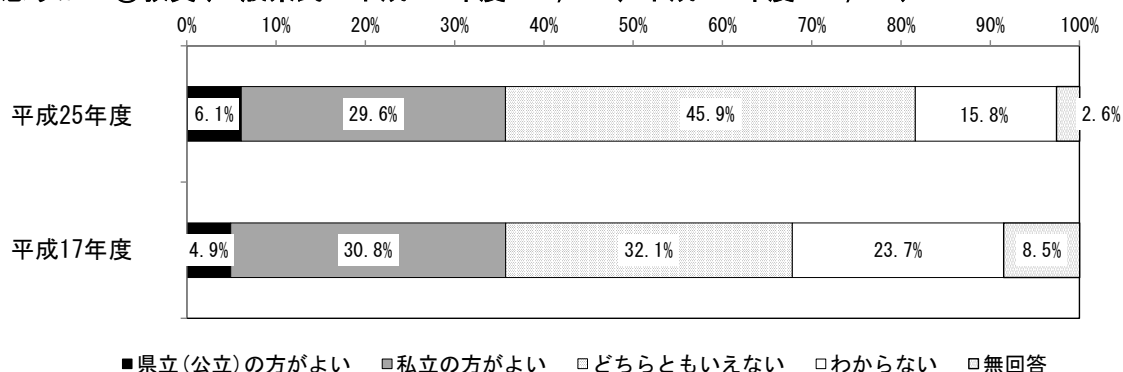
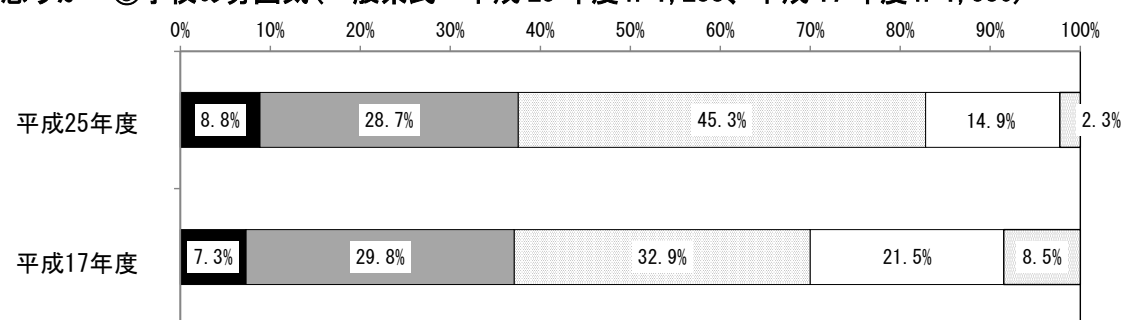


図 VII-25 県立(公立)高校と私立高校を比べると、次の点について、どちらの方がよいと思うか ⑧教員(一般県民 平成25年度 n=1,233、平成17年度 n=1,530)



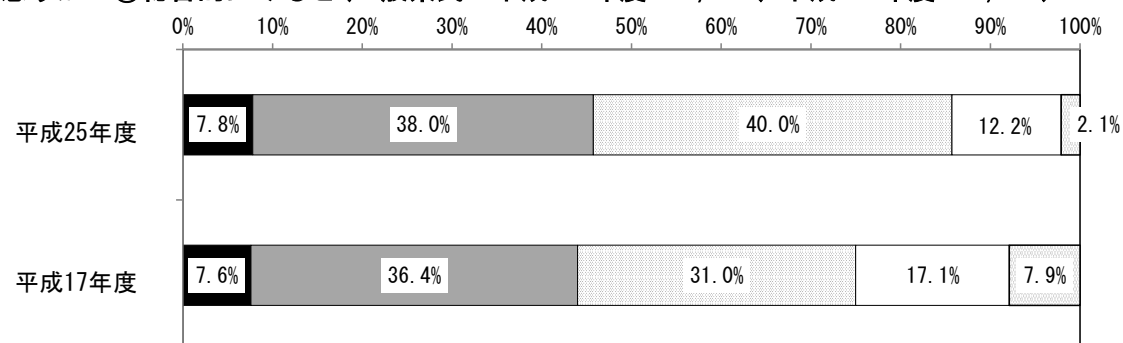
■ 県立(公立)の方がよい □ 私立の方がよい □ どちらともいえない □ わからない □ 無回答

図 VII-26 県立(公立)高校と私立高校を比べると、次の点について、どちらの方がよいと思うか ⑨学校の雰囲気(一般県民 平成25年度 n=1,233、平成17年度 n=1,530)



■ 県立(公立)の方がよい □ 私立の方がよい □ どちらともいえない □ わからない □ 無回答

図 VII-27 県立(公立)高校と私立高校を比べると、次の点について、どちらの方がよいと思うか ⑩総合的にみると(一般県民 平成25年度 n=1,233、平成17年度 n=1,530)



■ 県立(公立)の方がよい □ 私立の方がよい □ どちらともいえない □ わからない □ 無回答

図 VII-28 もし、あなたが（またはお子様が）中学3年生だとしたら、県立（公立）高校と私立高校のどちらを選ぶか（一般県民）

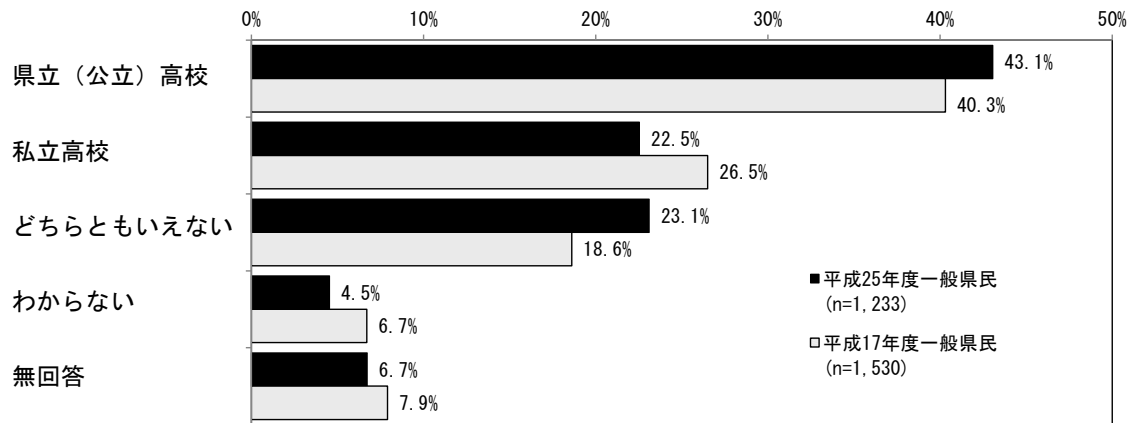


図 VII-29 県立（公立）または私立を選んだ理由（一般県民）

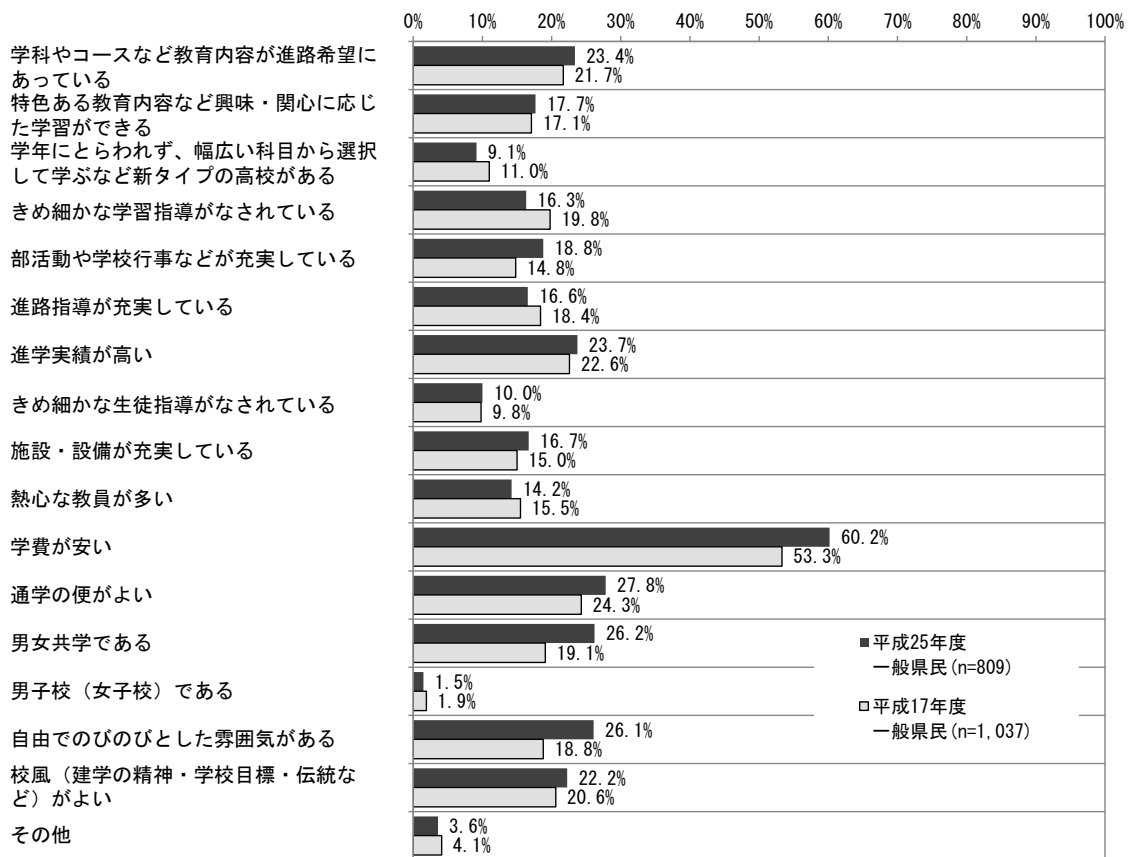


図 VII-30 県立(公立)を選んだ理由(一般県民)

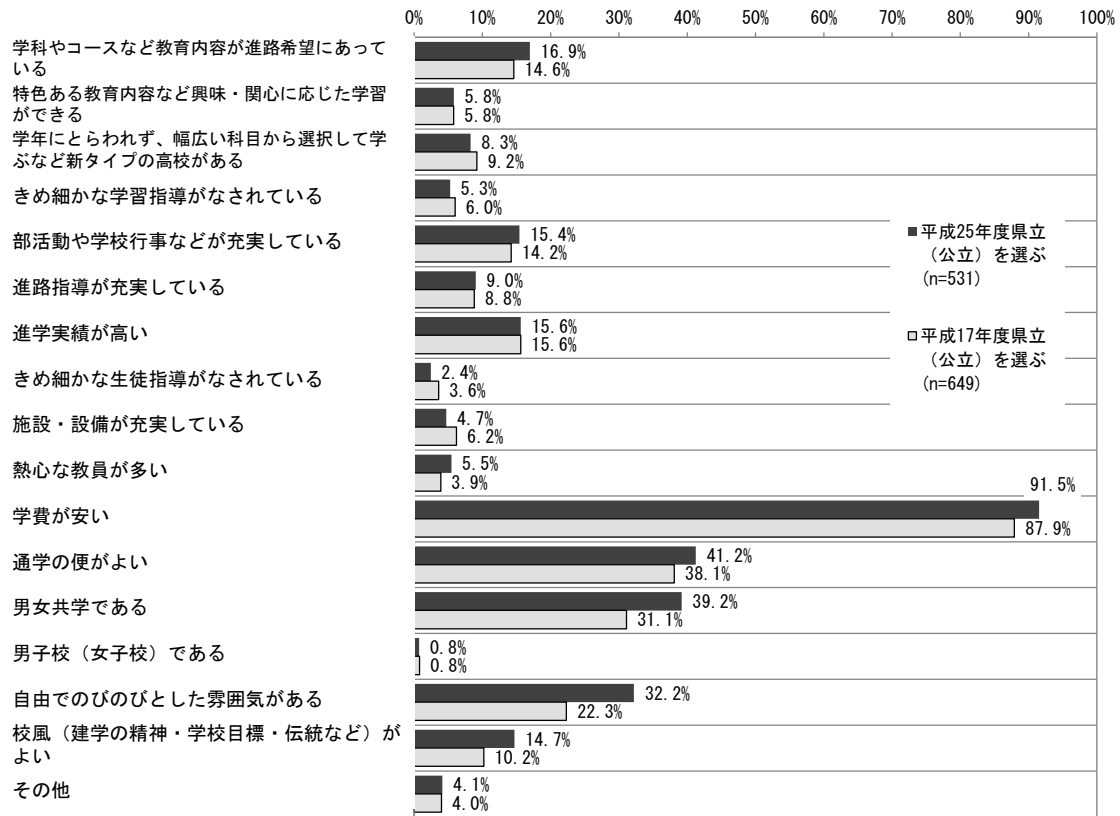
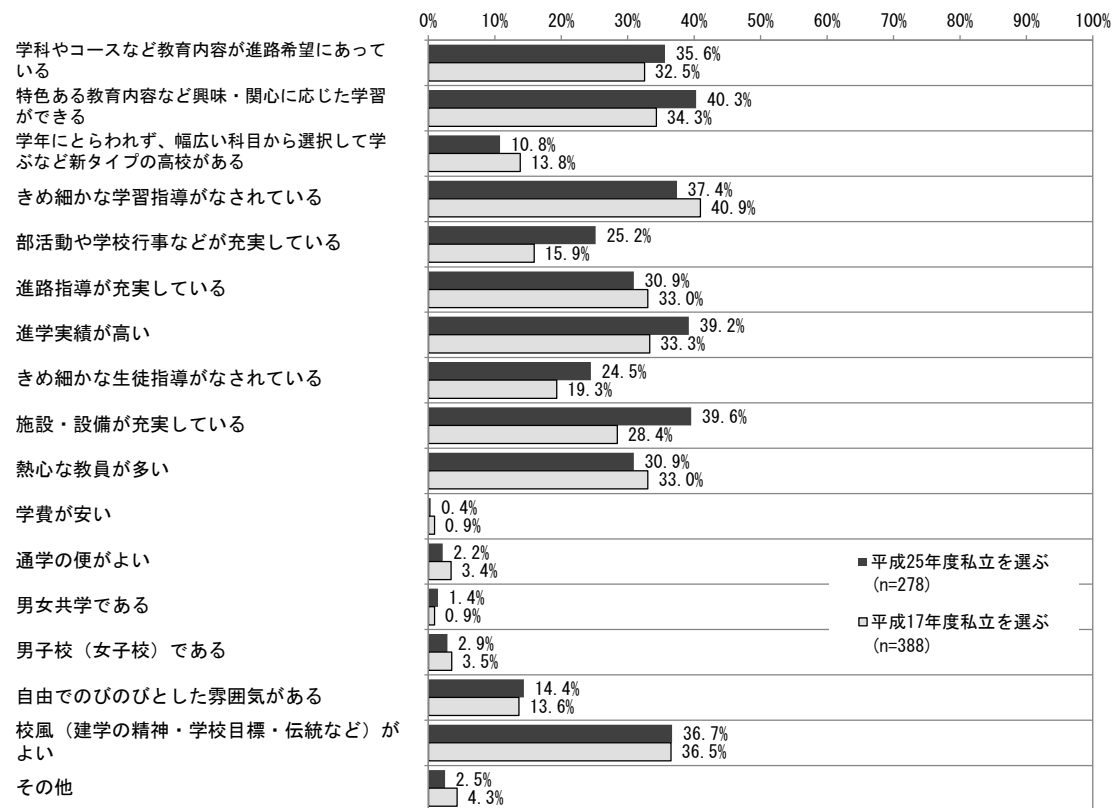


図 VII-31 私立を選んだ理由(一般県民)

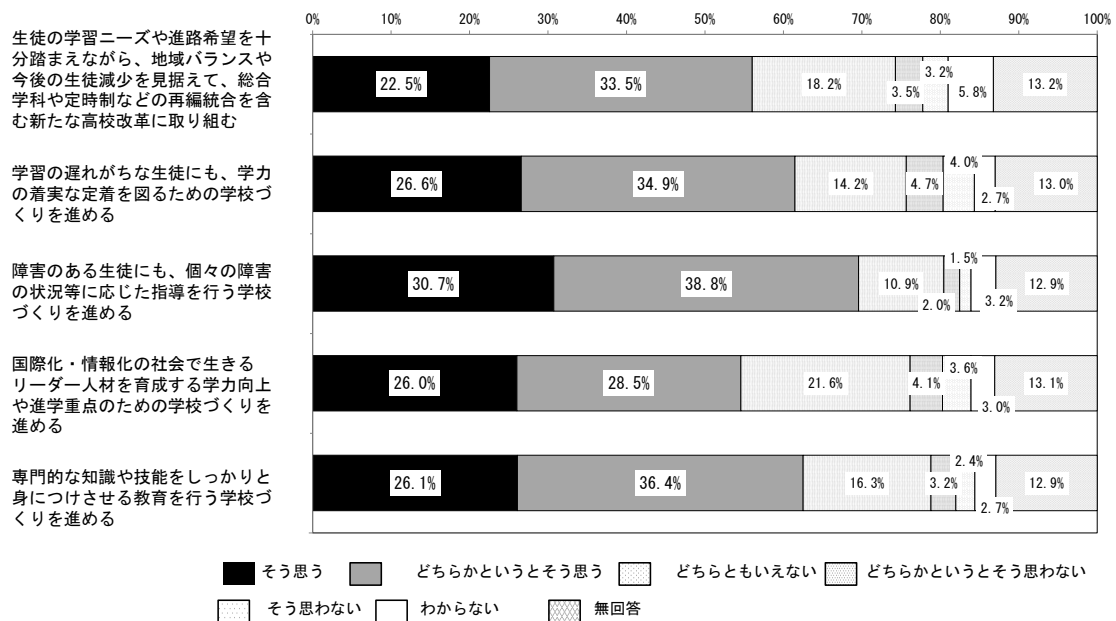


VII - 7 県立高校の改革の取組み

一般県民に対して、『県立高校の改革の取組み』について、将来の県立高校にどのようなことを望むかを聞いたところ、回答の割合が高かった項目は「障害のある生徒にも、個々の障害の状況等に応じた指導を行う学校づくりを進める」、「専門的な知識や技能をしっかりと身につけさせる教育を行う学校づくりを進める」、「学習の遅れがちな生徒にも、学力の着実な定着を図るための学校づくりを進める」であった。

『県立高校の改革の取組み』について一般県民に聞いたところ、「そう思う」または「どちらかというと思う」と回答した割合が高かった項目は、「障害のある生徒にも、個々の障害の状況等に応じた指導を行う学校づくりを進める」(69.5%)、「専門的な知識や技能をしっかりと身につけさせる教育を行う学校づくりを進める」(62.5%)、「学習の遅れがちな生徒にも、学力の着実な定着を図るための学校づくりを進める」(61.5%)であった。(図VII-32 参照)

図 VII-32 県立高校の改革の取組み(一般県民 n=1, 233)



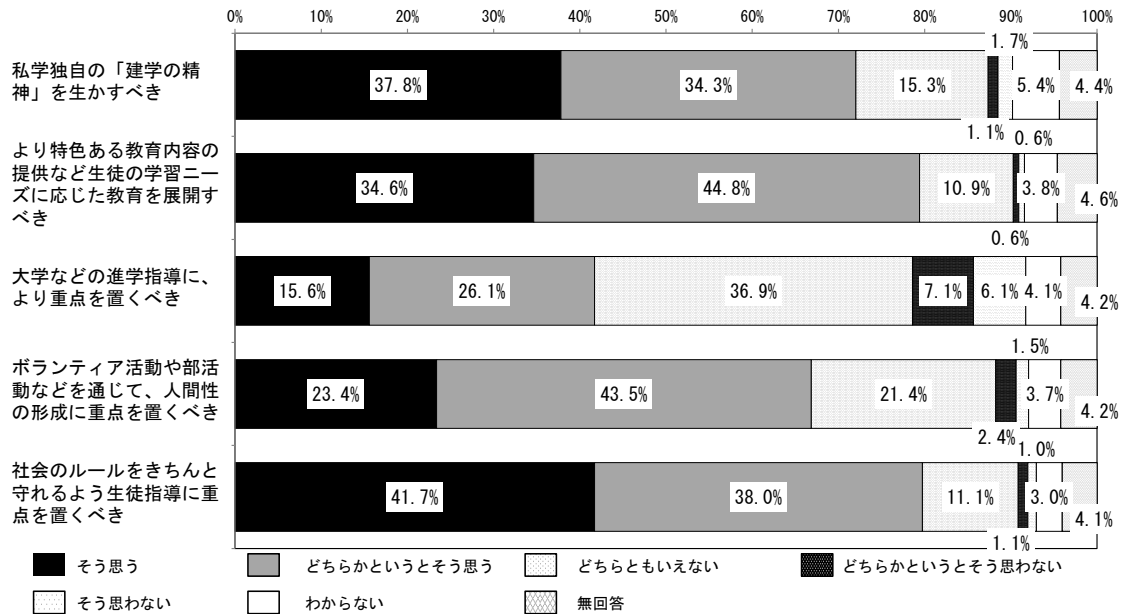
VII - 8 私立高校のあり方

一般県民に対して、今後の「私立高校のあり方」についてどのように思うかを聞いたところ、回答の割合が高かった項目は「社会のルールをきちんと守れるよう生徒指導に重点を置くべき」、「より特色ある教育内容の提供など生徒の学習ニーズに応じた教育を展開すべき」、「私学独自の『建学の精神』を生かすべき」であった。

また、回答の割合が最も高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、一般県民の回答はいずれの調査においても「社会のルールをきちんと守れるよう生徒指導に重点を置くべき」との回答の割合が最も高く、平成 25 年度調査では 79.7%、平成 17 年度調査では 79.5%であった。

『私立高校のあり方』について一般県民に聞いたところ、「そう思う」または「どちらか」というと「そう思う」と回答した割合が高かった項目は、「社会のルールをきちんと守れるよう生徒指導に重点を置くべき」(79.7%)、「より特色ある教育内容の提供など生徒の学習ニーズに応じた教育を展開すべき」(79.4%)、「私学独自の『建学の精神』を生かすべき」(72.1%)であった。(図VII-33 参照)

図 VII-33 私立高校のあり方(一般県民 n=1, 233)



平成 17 年度調査との比較

『私立高校のあり方』について、「そう思う」または「どちらかというと思う」と回答の割合が高かった項目を平成 17 年度調査結果と比較すると、一般県民の回答は平成 25 年度調査では「社会のルールをきちんと守れるよう生徒指導に重点を置くべき」(79.7%)、「より特色ある教育内容の提供など生徒の学習ニーズに応じた教育を展開すべき」(79.4%)、「私学独自の『建学の精神』を生かすべき」(72.1%)であり、平成 17 年度調査では「社会のルールをきちんと守れるよう生徒指導に重点を置くべき」(79.5%)、「より特色ある教育内容の提供など生徒の学習ニーズに応じた教育を展開すべき」(76.0%)、「私学独自の『建学の精神』を生かすべき」(68.7%)であった。(図VII-34～38 参照)

図 VII-34 私立高校のあり方 私学独自の「建学の精神」を生かすべき(一般県民 平成 25 年度 n=1, 233、平成 17 年度 n=1, 530)

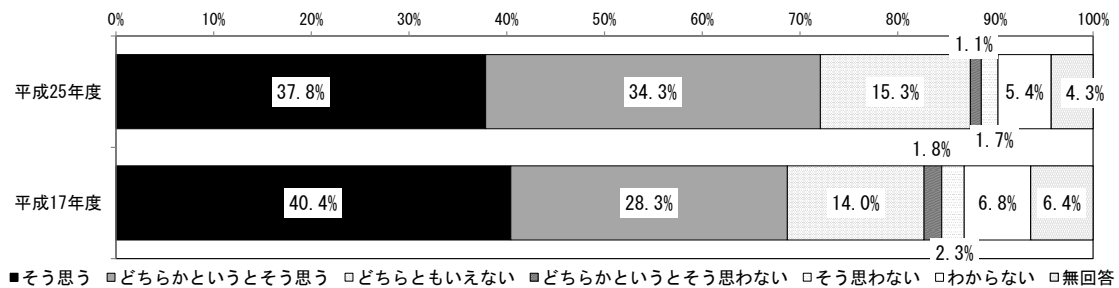


図 VII-35 私立高校のあり方 より特色ある教育内容の提供など生徒の学習ニーズに応じた教育を展開すべき(一般県民 平成 25 年度 n=1, 233、平成 17 年度 n=1, 530)

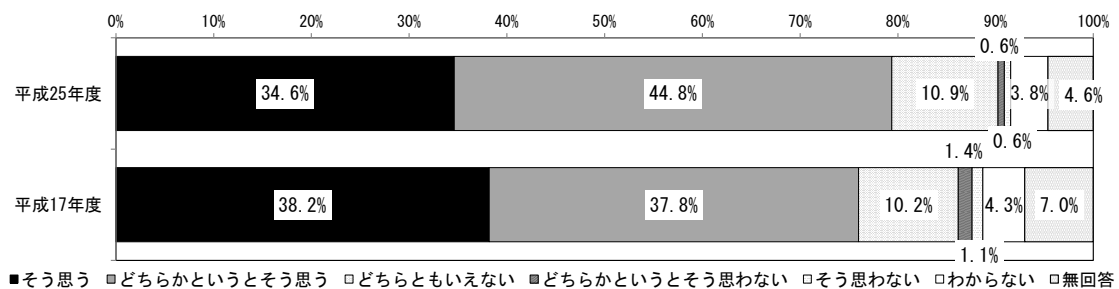


図 VII-36 私立高校のあり方 大学などの進学指導に、より重点を置くべき(一般県民 平成 25 年度 n=1, 233、平成 17 年度 n=1, 530)

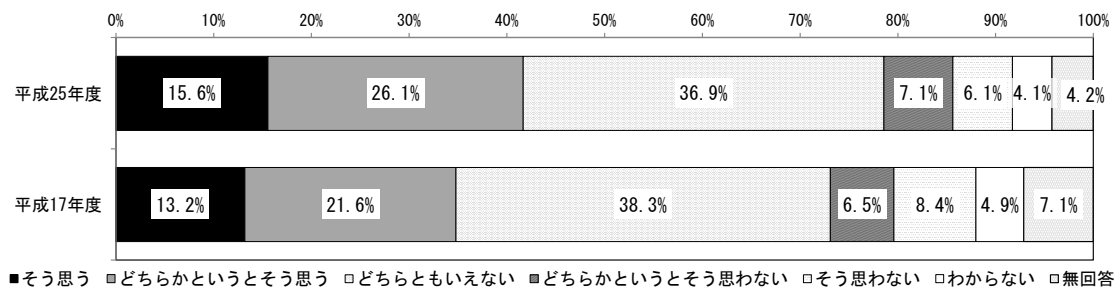


図 VII-37 私立高校のあり方 ボランティア活動や部活動などを通じて、人間性の形成に重点を置くべき(一般県民 平成 25 年度 n=1, 233、平成 17 年度 n=1, 530)

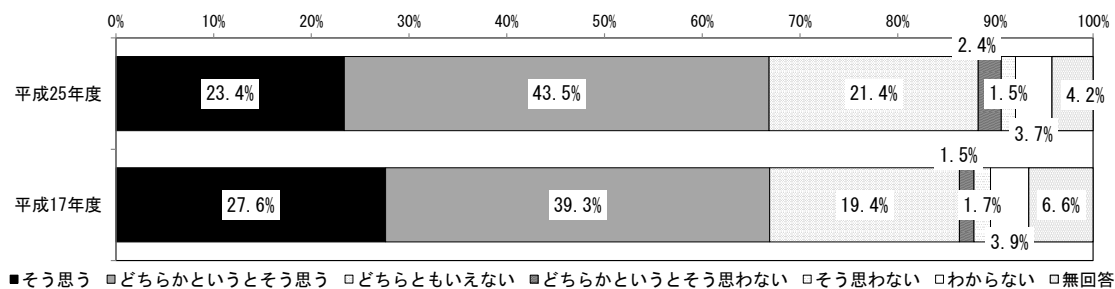


図 VII-38 私立高校のあり方 社会のルールをきちんと守れるよう生徒指導に重点を置くべき(一般県民 平成 25 年度 n=1, 233、平成 17 年度 n=1, 530)

